

---

# マブラヴオルタネイティブ～ネタとチートで目指せ大団円・・・の序章編～

柚子 ぽんず

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マブラヴオルタネイティブ〜ネタとチートで目指せ大団円・・・の序章編〜

### 【Nコード】

N5735S

### 【作者名】

柚子 ぼんず

### 【あらすじ】

マブラヴオルタネイティブの世界に現れたのは数々の二次元の世界を渡り歩く男。

その男の旅の理由は数多の名だたる世界の主人公達から「主人公属性を分けてもらう」こと。

古今より白銀武の主人公属性は軒並み高いと言われていた。それは彼のループする因果導体という性質によるものだ。

地獄のようなループを繰り返してきた白銀武から主人公属性を分け

てもらうにはそう…それは簡単。大団円を目指せばよいのだから…  
ここに、二次元世界ごめんの能力を持った男が悲運の主人公と手を取り世界を救う旅に出かけるための準備のお話。

作者の文才のなさのためクロスオーバー作品の、ガンダムシリーズ、勇者特急マイトガイン、重戦記エルガイムにつきましての原作知識のない方は読まれることを回避いたしますことを推奨します。  
できる限り画像を見たりすればわかるような描写をしたいと思いますが現状が作者の現界ですのでよろしくお願いいたします。

## 第一話 その男、ネタとチートを持つ男（前書き）

始めまして、どうしてもマブラヴのSSが書きたくてネタとチートでのんびりと書いていくことにします。

最初に申し上げさせてもらいますが原作キャラは死にません。なんせ大団円を目指しますので。それがOKな方のみお読みください。

## 第一話 その男、ネタとチートを持つ男

見渡すは限りない廃墟と人を感じない無人の荒野。

目に映るは乗り手を失い鉄くずとなった人の操りし鋼の巨人。

空は曇り、水は濁り、誰一人としてこの世界に希望など見出すことはできないだろう。

だが、そこには未だ抗い続ける人たちの姿があった。

「ついに…この世界に来ることになったなあ」

一人の男が荒野に立ち地平線を眺める。

年は20代になったばかりであろうか？若い顔立ちと東洋風の風体をしている。

「ねえ…ここが幸村の言ってたマブラヴっていう世界なのかな？」

東洋風の男の横に立つのは西洋風の少女。長く美しい金髪とそれを際立たせる端正な顔立ちに思わず見惚れずにはいられない。

「ああ…ついに来ちゃったなあ」

「すごく空気がピリピリしてるね」

「そりゃそうだ、ここじゃ飯も禄に食えないのが当たり前だから」

男は目の前の惨状を見てもまるで知っているとわんばかりに話す。あるのはあきらめや絶望とは違う、避けていた順番がついに回ってきた程度の顔。

「生きていくのが…あたりまえじゃなくなるんだね」

「後悔してるか？」

男は少女に振り向く。少女は男の眼をしっかりと見つめ返し

「全然ッ」

男はそうかと一言つぶやき少女を抱きしめる。

抱き合う二人を守るように立っているのはこの世界の鋼の巨人とは全く持つて風体の異なる巨人。

両肩が新幹線の姿をしておりフォルム全体から強く電車をイメージさせるその姿。

「幸村、シャルロット、そろそろ移動したほうがよさそうだぞ」

「ガイン…もちつと空気読もうぜ…」

「もう…恥ずかしいなあ」

幸村と呼ばれた男とシャルロットと呼ばれた少女がその巨人、マイトガインに向かって話しかける。

「すまない、だがどうやら近くで戦闘が始まっているようだ、せめ

て私に乗ってくれ」

「戦闘…だと！？ガイン、ここはどこだ？日本なのか？」

「いや、ここはヨーロッパのイギリス領にあたるはずだ、だがわたしの地図にはこのような廃墟など登録されていないのでな…断定はできない」

「ここがイギリス…やっぱり僕の知ってる世界とは違うんだね」

シャルロットが感慨深そうにつぶやく。

「ucci、どのみちこのままじゃここも戦闘になるか…この世界でガインのフォルムはかなり目立つが…しかたねえな、シャル！行くぞ！」

ガインに乗り込む2人。

「BETAだっけ？かなりの物量で攻めてくるんだよね？ガインだけじゃつらいんじゃないの？」

「そうは言っても俺達の機体がない。この世界じゃISもないしな、ここはガインにがんばってもらうしかねえ」

「うん…」

「幸村！接敵まで距離2000を切った！」

「全武装オールグリーン！ガイン！行くぞ！」

こうして3人はマブラブオルタネイティブの世界に来て20分と立たずにして戦闘に巻き込まれることになる。それも欧州の地にて。

異形の生命体。BETA。圧倒的数でもって押し切る戦闘を基本とし人類はその数を質でもって対抗するしかなかった。

「くそ！くそ！このくそがああああ！！」

「スラツシュ1よりHQ！支援か援軍を！このままじゃ戦線が崩れるぞ！！」

「HQよりスラツシュ1へ、支援砲撃まであと10分。援軍到着までは7分だ」

「もつわけねえだろ！ちくしょうが！！」

スラツシュ1が操るのはF-15イーグル。欧州でも盛んに取り入れられている第二世代戦術機の名機と言われる機体だがすでに戦闘続行は困難なほどに疲弊していた。

「スラツシュ4！！ウェット！？ウェットオオオ！！」

部下が次々とやられていく。スラツシュ1の隊長は悔しさから涙で視界をゆがませた。

「ちくしょう…ちくしょう！！」

もうあきらめて要撃級の餌食にでもなろうかという考えが頭をよぎった瞬間、オープンチャンネルで聞こえてきた言葉と異形の戦術機



「銀の翼に希望<sup>のぞみ</sup>を乗せて、灯せ平和の青信号！ 勇者特急マイトガイ  
イン！ 定刻通りに只今到着」

そんな歌舞伎な台詞とポーズを決めていた異形の戦術機が次々とB  
ETAを葬り去っていく。

「なんだありや？ 戦術機…なのか？」

思わずつぶやくスラッシュ1

「ここはしばらく任せろ！ 弾薬をありったけもってこい！ いそげ！」  
なんにせよBETAと戦っているということは敵ではない。そして  
鬼神のごとくBETAを屠るその姿を見て崩れかけた前線衛士たち  
も鼓舞されていく。

「いやあゝ一度で良いから言ってみたかったんだよなあ」

「不謹慎だよ」

「まあでもいい感じに鼓舞されてんじゃん」

「でもしゃべってなかったらもつと人を救えたんじゃない？」

シャルがほっぺを膨らませにらんでいる。

非常に愛らしいしもつともな意見だが幸村は悲しい笑みを浮かべて  
返す。

「たしかに一時の間助けることは可能だろう。だがあいつらを守り

ながら戦えるほど俺に余裕はない。もちろんガインにもな、この世界では守りたいものなんて手のひらからほとんど零れ落ちていく。ここはそういう世界だ。だったら目の前の大事なもののだけに集中するさ」

そんな間にもマイトガインは奮戦し、戦線を支え、ようやくきた支援砲撃によりBETAは一掃されどうやら戦闘は終了のようだ。だがマイトガインには思わぬ歓迎がよこされた。

先ほどのスラッシュ小隊のメンバーに取り囲まれ銃を向けられている。

「助けてやったのに手荒な歓迎なこと」

「その妙な戦術機、助けてもらった礼もある。おとなしくついてきてくれないか？」

「どうするのだ？ 幸村」

「ついていくしかねーわな、ガインも無傷ってわけじゃねだろ？」

「たしかにシステム系統に少しエラーが見られる。ではついていくとしよう」

戦術機に囲まれて移動するマイトガイン。なかなかシユールな光景です。

## 第一話 その男、ネタとチートを持つ男（後書き）

どうも柚子ぼんずです。

この物語はこれはひどい展開です。ノリとネタがわかる人は楽しんでいてください。それと文章は短めです。1話2000文字程度で進みたいと思っています。

第二話「ネタとチートも常識には敵わない」(前書き)

第二話です。そろそろ知っているひとにはばれていきますね。キヤ  
ラとかガインとか…

## 第二話　ネタとチートも常識には敵わない

国連欧州方面第8軍レスター基地。そこに連行：もとい任意同行した幸村ら一行はすぐに数時間にのぼる身体検査と事情聴取を行われた。

幸村はイギリスで新機軸の戦術機開発中にBETAの進行を受けそのまま難民に、シャルロットは現地難民になりそこで幸村と出会い一緒にいる、どうやってもボロがでそうな嘘をつく。いや突き通さねばならない。いきなりロボットと一緒に転生しましたなどとは口が裂けても言えない。

「民間で戦術機の開発は行われてはいたがな、旋風寺コンツェルンなどイギリスで聞いたことがない、それにあのマイトガインという戦術機あの機体は我々現行の戦術機とは作りが大きく違う、いや違いすぎる」

そう言つて一旦言葉を切つたのは、思わず同姓のシャルロットでさえ見惚れる麗人。このレスター基地司令、名をマリア・F・フィッツガルド准将というらしい。

一通りの検査と聴取が終わつたあとこのマリア司令の所へ通された。まずは味方部隊を救つてくれた事への感謝、律儀にも頭まで下げてもらったのだ。

このレスター基地はイギリス領の最前線とも言える場所に建設された基地である。実際のレスターの名のつく都市とは場所も規模も違うがなぜかこの名前がついたそうだ。

「まあそういわれましても弱小会社でしたのでね、お目にかからないのも当然かと」

「資料にすら載っていないのだから当然であるな？」

流そうとする幸村に二ヒルな笑みを返すマリア司令。

「それに局地戦専用で開発してましたからね、戦術機扱いもされてなかったのかもしれませんが」

「ほう、あの性能でな、それに局地戦？あの性能ではハイヴの中とでも言うのか？」

「設計当時はハイヴ突入もありえましたので」

ハイヴ突入に対してもなんら顔色を変えない幸村にマリア司令の目つきも変わる。

確かにマイトガインの性能ならばハイヴ突入を意識して作られていてもなんら不思議ではない。

常識外のスペック。日本の武御雷やラプターをも凌ぐのではないかというスペック。

実際には余裕で越しています。なんせ勇気とか希望とかでパワーアップしますから。それに超AIは伊達ではない！

「まああれについてはまだいい、だが戦力である以上簡単には手放せん、貴様らの身元がはつきりせんのも問題だ」

「釈放したとたんにドンでは話になりませんかね」

ここまで口を閉じていたシャルロットがはじめて口を開いた。

「どうすれば納得してくれるんです？司令直轄の特殊部隊にでもありませんようか？」

幸村が提案を出す。どうせ軍に入るなら身軽なポジションのほうがいいからだ、いずれは横浜基地に行かねばならないのだし。

「あれの操縦ができるのならば戦術機も操縦できて叱り、か」

「乗ったわけじゃないんでなんとも言えませんがね、多分二人ともこの基地のエースくらいにはやれると思いますよ？」

「言ってくれるな、乗った事もないのか？」

「一週間時間をください、シャルと二人で見事この基地のエースを撃破して見せましょう、俺たちの処遇はそれまでは保留ってことで」

「良いだろう、見せてもらうぞ。もし貴様らが見込みの無いレベルだったらあのマイトガインとやらはこちらで接收させてもらう」

こうしてマリア司令との初顔合わせは終わった。

場所は変わって仮であてがわれた部屋にて幸村とシャルは向かい合っている。

「また勝手なこと言ってさあ…知らないよ？負けちゃっても」

シャルはどうやらご機嫌斜めのような。っていつかやつぱり花澤ウオイスは癒されるなあ。などと中の人？ネタで盛り上がる幸村をよそに。

「ねえ！幸村聞いてるの？」

シャルが上目遣いに睨みながら顔を近づける。正直…たまりません。

「負ける要素が見当たらねえな、それでも世界を渡った数は両の手どころか両足足しても足りねえんだぜ？機動兵器の操縦なんざすでに何度も経験済みよ」

そう、この男、ガンダムからスーパーロボットまであらゆる世界で戦い続けたのだ。今更戦いのいろはを学ぶ必要も無い。だが、慢心はよくないよね。

「だから俺はシャルをこの一週間で鍛えてやる。ISとは全然操縦感覚が違うからな。その間に俺も勘を取り戻すさ」

過去に経験したことすべてが生かせるわけではないのだ。使わない技術は忘れていく。この男。戦場に行ったこともあればまったく戦いのない学園ラブコメの世界にも行っているのだ。操縦技術が抜けていてもおかしくはない。

そして二人はシュミレーターに向かう。

「かあゝゝ反応が鈍いつたらありやしねえな」

「んっ…さすがにちょっと…これは…」



二人が操縦しているのはEU連合が誇る新鋭機、ラファール。身軽さと軽快なフットワークはラプターや武御雷に引けをとらないはずの第3世代戦術機だ。だが二人にとっては着地の硬直、跳躍時のオートバランス、モーションキャンセルの不可などシャルにとってはISと、幸村にとってはMSや特機と比べては操作性は最悪であった。

「こりゃあXM3がなけりゃ話にならん…」

ぼやく幸村だがないものねだりをしてもしようがない。だがこの分では一週間も訓練する必要はなさそうだ。

それよりもISスーツで見慣れたはずのシャルのボディラインなのだが、なぜか強化装備姿のシャルを直視できずシャルもまた恥ずかしそうに体を隠すのだった。むしろこっちのほうが慣れるまでに時間がかかりそうだ。

第二話、ネタとチートも常識には敵わない、（後書き）

XM3は偉大です！

第三話　その男、不真面目だけど腕はあり　（前書き）

マイトガインがまだ出せません…だってまだ自由にうごけないんだ  
もの…

### 第三話 その男、不真面目だけど腕はあり

約束の日が来た。お互いに強化装備を着込んでシュミレータールームで対峙する4人。

このレスター基地のフラッグシップとも言える古参の衛士二名のエレメント。出撃回数も30回を超え、新人から司令部まで期待と信頼を得ており人格者。マリア司令からの信頼ももちろん厚い。

そんなバディー大尉とアディ中尉。名前と語呂からツインビーなんてあだ名もあるらしい。

その二人は全く油断する事もなく幸村とシャルロットと対峙する。

「それではルールを確認する、お互いにCPはなし、場所は何もない荒野、2VS2で行う。降参、あるいは全機行動不能にすれば勝利だ」

マリア司令が説明をしていく。

「了解しました」

淡々と返事を返すバディー大尉。アディ中尉も敬礼で答える。

「了解ッス」

「わかりました」

こちらはまだ軍属ではないので適当に返事しておく。どうせ軍に入

つたら厳しくなるしね。

「では全員シュミレーターに入れ」

シュミレーターに乗り込み機体のチェックをする。あの二人は確かに古参ならではの覇気と自身をもっているようだが悪いがやはり負ける気はしない。こちらら世界の平和どころか銀河をかけた大戦にまで望んだ豪傑だ。そうそうやられるわけにはいかない。

「シャル…いけるか？」

シャルロットに通信を入れる。この一週間でシャルもはつきりってかなりの腕前になった。ISで命を懸けた実践を踏んでいるし戦術機の揺れもISの目まぐるしい機動に比べればましなほうだと言っていた。

「うん、負けないよ」

全く持つて愛らしい。あとでその綺麗な髪に顔をうずめよう。

脳内妄想しているとシャルは目を細め汚物を見るような目をしてこちらをみていた。

「変態」

「ぐう…なぜ俺の考えている事がわかったような顔をしている…」

「真面目にしないとほんとに怒るよ？」

綺麗な笑顔で言われました。でも後ろには地獄が見えました。

「サ…サー！イエッサー！」

しょうもないやり取りもあったがついに敵さんとまみえることになりました。

おそらく相手もラファール。機体性能も同じ、完熟度では相手が上、そして経験も相手が上。

なら勝てるのは？奇抜な発想と努力と根性！見せるぜ熱いイナ マキック！

「状況開始！」

マリア司令の掛け声とともに動き出す。

装備はお互いに突撃前衛装備。対人戦はやっぱり縦は必須だよ。

「さあて…やっぱりまずは様子を見てきますか…」

開始早々にラッシュがくるなら迎え撃てたが相手が出方を待つ以上はこちらもつかつには出られない。強襲されればいくら腕があろうともやられてしまうのが戦場だ。ましてや旧OSのままでは何もできずやられてしまう可能性のほうが高い。

「シャルーそっちはどうだ？」

「熱源、振動、音波いずれもフラット。うまく隠れてるね」

センサーにはまったく反応が無い。完全に出待ちなようだ。

「ならいつちやいますか」

何も無い荒野でどうやれば振動が消せるのか？相手さんは全くその場から動いていない事になる。

うかつに動き回るこちらを狙ってのことなのだろう。前述とは矛盾するがこちらでも待っていては始まらないので動き出す事にする。

「シャル、主脚による移動のみだ、跳躍ユニットは使うな」

「了解」

ガシヤガシヤと二機のラファールは走り回る。

2分と経たずにアラームが鳴り響く。

右舷に見えるのは強襲前衛の二機のラファール。弾幕を張りつつ一気に詰めるようだ。そりゃああれだけガシガシや走ればばれもするし挑発にもなる。

「来たよ！幸村」

「距離200まで引き付ける。そのあとは…わかるな？」

「了解」

突っ込んでくる二期のラファールの弾幕をうまく避け防御しつつ引き付ける。その際ちゃんと反撃するのも忘れない。

「距離270…230…200！」

シャルの報告に合わせる様に二機のラファールが多目的装甲を相手のラファールに目掛けて捨て去る。

奇抜な行動に一瞬反応が遅れるがツインビーのエレメントは崩れることなく投げられた多目的装甲の対処をする。

「シャル！！」

「おっけー！」

幸村とシャルのラファールは一気に跳躍し空中でスイッチする。お互いをロックオンしていた相手を交換し36mmをばら撒く。

古参の衛士ほど陥りやすい簡単なワナである。光線級が存在により跳んでからの攻撃など行わないのがセオリーなこの世界でなんの躊躇もなく飛び上がり空中でスイッチし相手とロックオンの差異を起こさせる。

「もらった！」

36mmを受け死に体となったラファールに長刀で止めを刺す。

アデイ機致命的損傷、大破。

「これでっ！」

ラビットスイッチの技能は戦術機の操作でも衰えてはいなかった。独自のモーションプログラムを構築したシャルのラファールの驚く



べき武装交換速度にバディー大尉のラファールも自身が長刀を抜き去る前に120mmを受け大破した。

「それまでだ、まさかこれほどとはな」

驚くマリア司令の言葉に反論できる人間はレスター基地にはいなかった。

「くっ…イナズ キック出せなかった」

幸村はシュミレーターから出るとなぜか悔しそうな表情だった。

第三話　その男、不真面目だけど腕はあり　（後書き）

次はマイトガイン出せるといいなー

第四話　ネタとチートで勘違い!??　(前書き)

ガイン登場! シャルとガインは恋人どうし!?

#### 第四話　ネタとチートで勘違い！??

シュミレーターから出てくる一組の男女。それを見てレスター基地司令のマリア准将は驚愕を隠せないでいた。

レスター基地のフラッグシップ的存在にしてトップガンの2人の衛士を虚をついた作戦とはいえほぼ無傷で倒したにもかかわらず歓喜したわけでも勝ち誇った顔でもなく、男のほうはむしろ悔しそうな表情すら見せる。

「…見事だ、これで貴様たちの実力は証明されたな」

そしてこの一週間監視させていた部下からの報告によると人柄もよくすでにPXにも整備班にも知り合いができているらしい。過度に疑う必要もなくなった。

「いやあ、全く手も足も出なかったよ」

「あそこで跳ぶの？たいした根性してるわ、全く」

バディーとアディ。自分も信頼を置く二人の衛士も素直に負けを認めて相手を称える言葉を送っている。

「つつわけで俺達の処遇とかどうします？」

「まずはガインに会いに行かないと…」

そうマイトガインとは一週間会えていない。整備ガントリーに行くこと事態は許可されていたがマイトガインに触れることは許されな

かった。もちろん無駄な調査もされてはいないはずだが。

「ではサナダといったな、貴様は私と執務室に行くぞ、デユノアはそのままガントリーに行つて貰つてかまわん。大事な機体なのだろう？整備班には私から言つておく。整備してやるといい」

「ありがとうございます」

シャルロットは一礼してロッカールームに向かう。あのままではマイトガインに飛びつかんとする勢いだ。

「さて、では俺も着替えてきまつさあ」

「すぐに私の執務室へ来い。場所はわかるな？」

「OKつす」

そして幸村も歩き出す。

「指令、少しよろしいですか？」

バディー大尉が声をかける。

「何か？大尉」

「ハッ！あの連中は難民だと聞きました。その難民がなぜあのような戦術機の操作を行えるのでしょうか？あの空中でのスイッチもかなりの修羅場をくぐつてきた信頼と連携あつてのものだと愚考しますが」

バディー大尉のもつともな意見にマリア司令は口元をわずかにあげニヒルな笑みを浮かべ

「私が知っているのはやつらが民間の戦術機の開発会社にいたということだけだ」

それ以上は知らないし知りようもない。

「…了解しました」

これ以上聞いても越権にあたるとバディー大尉も感づいたのかそこで切り上げる。

「また相手してくれますかね？」

アディが質問すると

「必ずやるだろうよ」

バディー大尉は何かを確信した顔でうなずいた。

（しかしあれほどに快勝して笑顔ひとつこぼさんとはな…）

（悔しいけど器の違いを感じまったね）

ものすごい古参の2人の衛士からの株が上がっていることに当人達は気がつくことはなかった。もちろんマリア司令の反応も上場である。ただイナズ キックができなくて落ち込んだだけなのに…

第7整備ガントリーに向かって一直線に走るのは美しい金髪を惜し

げもなく振り回し整備兵や衛士（主に男性）を釘付けにする美貌を誇るシャルロット。

「いたあっ！！」

ガントリーに鎮座するのは戦術機とは大幅に異なるフォルムを持つマイトガイン。もちろん一般兵士の前でしゃべるわけにも行かず一週間ずつと鎮座したままだったのだ。

「ガイン」

まるで恋人にかける言葉のごとく甘い発音でガインの名を呼ぶシャルロット。すぐにマイトガインのコックピットに入り込む。

「シャルロットよ、久しぶりだな」

「ガイン！変なことされなかった！？怪我は大丈夫？」

「わたしは問題ない、システム類のエラーも7割がた解析終了している」

「そっか、ならすぐに整備してあげるからね！」

「すまないな、シャルロット」

「もう！シャルでいいってば」

「そうだったな、シャル」

シャルとガインは仲が良い。もちろんもとの世界ではなんら接点の

ない2人？だったが幸村を通していくつかの世界をともに旅した結果すでに親友にいたるまでになった。もちろんガインがいるのは機動兵器郡のある世界のみでしかなかったが。

マイトガインのコックピットから出たシャルロットを迎えたのはこの機密性の高い第7ガントリーの責任者である整備班長だった。

「おまいさんがシャルロットさんかね？」

「はい！シャルロット・デュノアです」

「ワシはこの整備班長をやつとるもんだ、さつそくあの戦術機の整備をしてやりたいんだがマニュアルかなんかあるのかい？さすがに一週間も放置してりゃあ整備班長としては見るに耐えなくてねえ」

そうマイトガインには接触禁止の命令が出ていた。だが班長は機体洗浄くらいしてやらなきゃ可愛そうだといってマイトガインをひそかに洗ってくれていたのだ。

「はい、こちらに。ある程度の部品は規格品でまかなえると思いますが一部は設計から始めないといけないかもしれません」

シャルロットも丁寧に答える。これから自分たちが乗る機体やらを任せることになるのだ、第一印象は大事だよね！

「しっかしなんで両肩が新幹線なんだい？」

班長のもつともな質問に

「あの…えっと…うううう」



答えられないシャルロットであった。

第四話　ネタとチートで勘違い！？　（後書き）

いつになったら武ちゃんは出てくるんだ！？

## 第五話 その男、うっかり (前書き)

ここから魔改造編にはいります。無理な方はここらへんで…そして  
武ちゃんまだー？

## 第五話 その男、うっかり

俺たちは、いや俺は大事な事を忘れていた。一週間シャルと戦術機の完熟に没頭しすぎたため今が何年の何月何日かを聞いていなかったのだ。はつきり言っただけなら日付なんて正直この世界ではあまり意味をなさないからだ。

BETA進行にともなう気候の変化により砂漠に雨は降るし密林に雪だつて降る。すまんそれは言いすぎだ。

だが6月に雪が降ったこともあるし、その翌日には海水浴にでかけられるほどの日差しが出る事も正直ないこともない。だからというわけではないがすっかりわすれていた。

「2001年の1月…か、あいつが出てくるまで9ヶ月…それまでにどこまで準備できるかが勝負どころか…」

白銀武が現れるのは2001年10月22日。それまでには横浜基地に着任したいのと同時にXM3を除くできうる限りの戦術機自体のスペックアップ及び、武装の開発をしなければならない。

多岐の世界を練り歩いた幸村にとって戦術機の装備は貧弱極まりなかった。二足歩行の巨大ロボットが闊歩する世界で武装はすべてが実弾兵器、及び実体剣。高周波ブレードもなければレーザー対艦刀もない。唯一あるとすればXFJ計画における超電磁砲くらいだ。

「何から手をつけるかね…」

さしあたって必要なのは武装だろう。XM3が配備されれば戦術機

はそれだけでMSと渡り合えるほどの機動性を持つことができる。  
装甲は紙でしかないが…それは宇宙に進出した世界観との相違って  
やつだろう。

むしろほとんど宇宙に進出していない状態で、地球の資材だけでこ  
こまで強力な機体を作り上げたこの世界の技術者には感嘆を述べた  
いほどだ。

「やっぱり高周波ブレードの量産かレーザー対艦刀は欲しいね。国  
によつてはドッグファイトを敬遠する国もあるみたいだけど」

シャルが意見を述べる。あまり格闘をするタイプではないがさすが  
に実体剣でのちゃんばらはごめん被りたいとの事だ。

「そうだな、それはさっそく製作にとりかかるとするか。あとは射  
撃兵器はどうするか…」

この世界にはもちろんビームという概念は無い。ミノフスキー博士  
がいないのだし。レーザーは金属加工のためなどから古くから使わ  
れていたし、そのレーザーを飛ばしてくる相手もいるわけだし完成  
してもさほど影響はないだろう。

「難しいところだね、あまりに先を行き過ぎる兵器はかえって争い  
を呼ぶしね」

主に米国とか…

「苛電粒子砲は淒乃皇に搭載されるまでは使えないし、かといって  
こっちがレーザー使うのもなあ」

ISは腕に装備されていますよ？おつそろしい…

「やっぱり妥当なところで超電磁砲じゃないかな？」

「だましましで使っていくしかねえか」

こうしてまずは比較的共通用途であるMSの技術を応用した（ガイ  
ンがデータを持っていてくれました）戦術機の武装方面強化案  
はまとまった。

「機体のほうはこのままラファールでいくの？僕にとっては確かに  
馴染み深い名前の機体だからかまわないけど」

「どうせだから少しいじっておこう。リヴァイヴカスタム？になる  
くらいに」

「それって無茶苦茶改造になるよ…」

思わずあきれるシャルロット。

「少佐あ！！大尉殿ー！！」

整備兵が走ってきた。ちなみに少佐が幸村で大尉がシャルロットで  
ある。幸村はもとも軍人も経験しているしシャルロットは副官の  
ため、ある程度の階級は必要だ。技術仕官として任官しているため  
部隊を引き連れることもないしマリア司令が妥当だと判断した。

「どしたー？」

「班長からリストを預かってきました！」

もらったリストにはマイトガインに流用できそうなパーツと、現段階で取り寄せられる範囲での小型で高性能コンピュータのリストである。

「ふむ…、まあこれならなんとかなる…か」

リストを睨みつつ顎をさする幸村。

「こんなもんで一体何を作るんです？」

思わず整備兵が声をかける。幸村もシャルも人当たりのよい性格をしているので整備班とは良好な関係を築けている。

「なに、従来とは一線を画する装備と機体を作ろうと思ってな」

「まあ作るというよりはカスタムだけだね」

「ええい！そこはつつこむでない！」

「一線を…ですか、楽しみにしています！」

整備兵はへたくそな敬礼をする。その顔は技術屋特有の新しいものに目がないという表情だ。

「しばらくすれば寝る間もないほどこき使ってやる。後悔するなよ？」

「ハッ！」

整備兵は去っていった。スキップしながら。

「いい人ばかりでほんと助かるよね」

「間違いないな、前線基地にはない暖かさがある」

「守れるかな？」

「守るのさ」

「そうだね」

ちよつと良い雰囲気になりかけたときに整備ガントリーには似つかわしくない人物が現れた。

「サナダ、横浜基地が正式に稼動し始めたぞ」

「…そすか」

わざわざそれだけを言いにくるために司令自らが来ることはありえない。なんとも言いがたい緊張感が漂い始めた。

「それと貴様らの横浜基地への転属願いだがな、却下だ」

「なんですとつ！？」

「いや正確には、横浜へ行く理由が無い」

「いや、俺日本人ですよ？」



「身元を証明できまい」

「ぬっ…」

「横浜に行きたければ私の紹介状がいる。軍とはそういうところだ」

「美しい基地司令様、なんなりとご命令をば、この真田幸村司令の御ためならばたとえ火の中水の…」貴様は先ほど面白い事を言っていたな」

最後まで言わせてもらえませんでした。

「高周波ブレードにレーザー対艦刀、それに超電磁砲、そのいずれかを完成させ実戦仕様にまでこぎつけられたら貴様を横浜に飛ばしてやる」

そう言ってマリア司令は去っていった。

「あんのクソ女！！！！40手前のくせに…ぐぬぬぬ」

そうこの基地司令マリア准将は見た目は20代半ばにしか見えないほど美しい。だが実際は40手前の妻子持ちらしい。

「あんまり悪口言わないほうがいい…遅かったね」

「あべしっ！」

レンチがナイフスルーで飛んできて幸村のでこをかち割ったとさ。

## 第五話〜その男、うっかり〜（後書き）

主人公の名前は真田幸村。もちろん偽の名前です。そう魂の名前で  
す。

ちなみに作者はシャルトゥ党です。

## 第六話　ネタとチートで魔改造　（前書き）

リアルなチートを目指しています。なんぞそれ？　つつこまないでください！　言いたかっただけなんです。

## 第六話　ネタとチートで魔改造

横浜基地に行くためになんとしても実戦レベルにまで仕上げなければならぬものがある。しかしどの道自分たちが横浜に行くまでに生き延びるためにもそれらの品々の早期製作は必須だ。

「お仕事　お仕事　らんらんるー」

作業着を着てなんとも調子の狂う歌を歌っているのはレスター基地の少佐様である真田幸村。開発、調整は好きな部類の仕事に入るのでテンションあげて飛ばして事中中。

「幸村、資料整理終わったよ、それとはい、コーヒーもどき」

シャルロットは作業よりも現場指揮や資料、報告書、物品受領など事務作業をこなす。とても正確でいてすばやい。頼れる副官でなおかつ気が利いて美少女。もうお嫁さん候補NO1だよな。

「うむ、こちらも一息入れるとしよう。データのロードに時間がかかりそうだしな」

現在は比較的簡単に作れる高振動高熱長刀。平たく言えば振動させて熱を出して切れ味を向上させた剣。類似武器で言うところのグフとかのヒートサーベル。まあ微妙に仕様がちがうけど。

それと同時に行われているのがラファールのOSの調整。欧州国連軍で取り入れられる最高クラスのCPUを搭載しなんとか先行入力とキャンセルの効果だけはいれることができた超劣化版のXM3。

即応性はあがらずコンボも使用できないが先行入力とキャンセルでそこそこには動けるようにはなっている。さしずめXM2、3つてところだろう。

ちなみにこのXM2、3は基地司令にも公開はしない予定。いずれXM3がくるのだからこのようなまがい品はいらないのだ。

だから進呈するのはヒートサーベルと簡易超電磁砲。XFJ計画の120mmを連発するような連射力、火力はないが小型でかつ戦術機の手腕で携帯できる仕様のものを仕上げる予定だ。

ちなみにこの真田幸村という男。なんでも小型化するのが趣味である。

「ヒートサーベルの製作はどう？」

「コーヒーもどきをすすりながらシャルが尋ねる。うむその姿も実に愛らしい。」

「データ上では完成してる。ってかまあ完成品のデータあるしな。フィードバックに多少の誤差が出る程度さ」

現在長刀ほど長すぎず短刀よりも長い手ごろなサイズの模索中。長刀はうまく使えるのは日本帝国くらいだし米国は装備してないし欧州軍の長刀は重たすぎて使いづらいのだ。

日本製の長刀はまさに切るための武器。欧州の長刀は叩き割るための武器。お国柄がよく出ている。

「コストのほうは？思ったよりかかりそうだけど」

「問題ないだろ、コストは上がるが耐久力も切れ味も使いやすさもあがる。これは量産しない馬鹿はいねえだろう。まっお披露目はしねーとだめだろうが」

「いきなり実戦に出すの？」

「俺たちは使える事を知ってるからな、だが古参の衛士ほど新しいものを嫌う傾向にある世界だ、どうすっかなあ」

マリア司令から脅迫のような命令を受けて早2週間。ヒートサーベルのプロトタイプはもう時期にあがってくるはずだ。なんとかラファールのOSの設定も完成したし仕様テストはしておいたほうがいいのかもしれない。

「超電磁砲の方は？」

「速射性タイプが4丁。威力性タイプが2丁。これはあと1週間ほどかな」

XFJ計画の超電磁砲の要求スペックはかなり高い。威力、連射、携帯性、そして信頼性。そのすべてを目標に作っているのだ。難航しても不思議ではない。さりとてこちらは各々に指向性を持つての製作なので現代の科学力でも十分にまかなえるのだ。

「順調だね」

シャルが思わず笑顔になる。うむ。ごはん三杯はいけるぜ！

「それとな、こいつがラファールの強化仕様の案なんだが」

幸村がモニターに写すとそこには背部の兵装担架を取り外し大型のスラスター。イメージとしてはインパルスガンダムフォースシルエットであろうか？そして跳躍ユニットを外し腰部に突撃砲とマガジンを携帯。左腕に二連装の36mmチエーンガンの内臓。背面の翼に沿うように試作中のヒートブレードをマウントしたもうラファールかなんなのかわからない戦術機があった。

「正面から見ればラファールだね」

シャルもあきれて言葉を返す。

「こいつはワンオフなんだぜ？もつとよろこんでくれよ」

そう、この機体はワンオフだ。この世界の衛士には空を飛ぶ概念が無い。飛ぶだけ無駄なのだから。だから跳躍ユニットなのだ。ジャンプの延長なのだ。だがこのラファールは空を飛ぶことを意識している。

スラスターの位置変更による機動性の特性が変わることは衛士にとつては容易に受け入れられるものではない。世界中のすべての戦術機は跳躍ユニットによる出力特性を持つ。

つまりすべての衛士はそういう使い方ができない。それがいきなり背中からの出力特性になりなおかつ出力が向上となるとそれはもはや別の乗り物。今までの操縦のノウハウが全く生かせなくなる。よってとてもじゃないが受け入れてもらえるようなものではないのだ。

この機体を動かせるのは現時点で世界でおそらく3人だけ。幸村と

シャルロット。そして白銀武。

あと後にこの超電磁砲について面倒ごとに巻き込まれる幸村なのだった。



## 第六話　ネタとチートで魔改造　（後書き）

武ちゃんに会うところにはすでに最強の機体が出来上がっているかも  
しませんね

外伝「ネタとチート武器あがりました」(前書き)

本編で説明すると長くなるので詳細っておどでもないですが漠然とわかってもらえたら助かります。

外伝「ネタとチート武器あがりました」

幸村が構築した新武装はあっという間に完成した。

01式趙振動高熱中刀。通称ヒートサーベル。従来の近接兵装とは耐久力も切れ味も使いやすさもはるかに凌ぐ高性能武装。しかも剣の心得がなくとも使用可能なところがポイントである。

欠点は充電が切れるとただの剣になること。そうすれば耐久力も切れ味も従来のもと同じになる。使用時間は常時展開で40分。ラックに戻すことで再充電可能。ただしあまり期待はできない。

二刀流にも最適でラファールが持てばまさに騎士！決め台詞はやっぱり「我が裁きを受けるがいい！」

01式電磁速射砲。速射レールガン。36mm支援突撃砲をベースに120mm部分を破棄し36mm専用の電磁速射砲となった。

マガジンも120mmを破棄した部分に新たに装着し6000発装填可能になった。電磁速射砲なので射程も威力もそれほど高いわけではないが通常の36mmとは比べ物にならない火力を持つ。

本体にバッテリーが内蔵されている。一度の戦闘でおそらくバッテリーが切れることはないが戦術機で再充電は可能。決め台詞は…ないな

01式電磁砲。 レールガン。 連射力を捨て威力と射程に主眼を置いた。 まさにレールガンの代名詞的使用。 ベースは通常の突撃砲だが36mmではなく60mmと口径を上げ120mmを破棄した部分にこちらもマガジンを装備し2000発を保有しているがおそらく打ちつくすことはできないと思われる。

連射性能がきわめて低く火力に任せて前に出すぎると敵を裁ききれずに追い詰められる可能性が高い。 後衛向きの装備である。 電力消費が激しく100発ごとに再充電が必要。 再充電はおよそ10分。 ただし戦術機の稼働時間が2%短くなる。 決め台詞は「無視すんなやごらあああ」

イナズ キック 戦術機の足の裏に仕込みタイプのモーターブレードを装備し回転させ、ブレード自身に通電させ高電圧を放出し相手に向かって蹴りをいれる大技。 ちなみに1回使うと戦術機の残り稼働時間が35%減少する。

決め台詞はもちろん「お姉さま、アレを使っわ！」

外伝、ネタとチート武器あがりました（後書き）

イナズキック。きっと強いと思います！

## 第七話　その男、戦場につき（前書き）

戦闘描写は相変わらず短いです。もっとうまく書ければいいのに…

## 第七話 その男、戦場につき

新武装の性能評価試験を実戦で行うなど正気の沙汰ではないが、過去に実物を再現しているため一度試運転さえしていれば幸村にとつてはなんら問題なかった。そしてH12リヨンハイヴの間引き作戦に幸村、シャルロット、マイトガイン、バディー大尉とアディ中尉の5人で臨時編成を組み参加するのであった。

マイトガインの衛士は不在。だって超AIだもん。しかしそれでは通らないのでバディーとアディには衛士が搭乗しているということになっている。機密のため通信はサウンドオンリーだが。

同じ小隊でサウンドオンリーなどバディーもアディも信じられないことだったがマイトガインという得体の知れない戦術機に乗っているのだからそれも致し方ないと思う事になっていた。

「さあて…いっちょいきますか」

編成は前衛を幸村とマイトガイン。中堅をバディー大尉。後衛をシャルロットとアディ中尉。

幸村が威力性、マイトガインが速射性、バディー大尉が威力性、シャルロットとアディが速射性のレールガンを装備している。ヒートサーベルは全機体搭載している。

間引き作戦なので無理に進撃せず部隊の後方にさがりおこぼれを排除していく。

「むう…これは…」

「爽快だね！」

バディー大尉のレールガンが突撃級を吹き飛ばせばアディ中尉の速射砲が要撃級の頭を次々と貫通していく。レールガン化の最大のメリットは貫通力の向上にある。36mmでも要撃級の頭くらいなら3〜4体は軽く貫くし60mmのほうでは殺せなくとも突撃級を吹き飛ばし致命的なダメージを与えられる。

「だがそれよりも、あの衛士たちは戦場でもあのような動きをするのか」

「バツタかって言いたいですね」

前衛のマイトガインと幸村はピョンピョン跳ね回りBETAを駆逐していく。シャルロットも高度こそ高くはないがずっと浮いたまま援護射撃を的確に行っている。

「ガイン、調子はどうだ？」

「問題ない、各部正常だ。パーツの不具合もおきていないようだ」

「そうかいっ」

要撃級の首を跳ね飛ばす、そしてまた跳ぶ、着地点はマイトガインとシャルロットの援護で確保。

「カスタムしてなかったら危なかったかもしれないね」

シャルロットが苦笑い気味に言う。旧OSと言わない辺りが彼女優



秀さが伺える。

「全くだ」

ちなみに幸村のラファールはシャルロットとほぼ同じ仕様である。イギリスにタイフーンを申請したところ却下された。理由はラファールのほうが生産開始が早かったため数が出回っている事と、

イギリスではあるが所属が国連軍なので比較的新しいタイフーンはイギリスが渋ったのもある。

「幸村、要塞級を確認した。前方の部隊が押されている」

「まあ、間引きだしなあ、このタイミングだと要塞級を相手にできる装備が弾切れもありえるか」

「少佐、援護に向かわれますか？」

「この速射砲なら要塞級でもダメージを与えられるでしょう」

ツインビーからの進言。

「つつし、なら援護に向かうか」

数百メートル離れた位置でも十分に補足できる要塞級のその巨体。120mmや弱点を狙わねば有効打を与えられないその強固な体に犠牲になったものも多い。

「各機散開、包囲して沈める」

「了解」

幸村とバディーが正面に並びレールガンを放つ。その衝撃は要塞級をふらつかせ、十分なダメージを与えている。そして要塞級が立ち直る前にシャルロットとアディが速射砲を放ちながら追撃する。

周りのBETAはすでに死滅しており残るは死に体の要塞級のみ。

「動輪剣！縦一文字斬！」

マイトガインが動輪剣を出して止めをさす。オーバーキルですよ

「部隊の撤収も始まったな」

「ずいぶん…やられたみたいだね」

そこらじゅうに転がっている戦術機の残骸。申請して断られたタイフーンのものもある。

シャルロットにとっても幸村にとってもわかってはいるがあまり気の良い光景ではない。

「撤収しましょう少佐。あまりちよろちよろしては厄介かと」

バディー大尉の進言がはいる。彼にとっても痛ましい現実だ。

「そうだな、全機撤収だ、バディー大尉もアディ中尉もよくやって

くれた。…監視がメインとはいえな」

バディーとアディの任務は監視とデータ収集だった。もちろん試作兵器もだがシャルロットと幸村、そしてマイトガインのデータのほうが重要なのだ。

「いえ、こちらも勉強になります。少佐たちの戦術は広められればきつと死亡者を減らす事ができるでしょう」

「この新武装もですよ、少しばかり燃費が悪いようですが」

「ありがとう、まあ燃費のほうはあきらめてくれ、現行の戦術機の主機ではこれが限界だ」

4人の残りエネルギーは半分を切っている。跳躍ユニットは補給できるが機体の稼働エネルギーは戦場では補給できない。それにくわえてヒートサーベルにレールガン。どちらも電力を食う武装なのだ。それと予定よりも大幅に再充電時の電力消費が確認された。

「ははは、了解です」

機体を担架に乗せ休息にはいる。ちなみにマイトガインはトレーラーの上で座っている。理由は担架には入らないから。（フォーマル的には意味で

「シャル…なんだ…その…元気出せ」

主機を落としたコックピット内で強化装備による通信を行っている。顔は見えないが、幸村はシャルロットが落ち込んでいることを見逃すほど鈍感ではない。

「大丈夫、大丈夫だよ…泣いたり…しないから」

作戦時間はおよそ6時間。その間に通信に響いた断末魔は数知れず。そのたびにシャルロットの端正な顔が苦痛に歪んでいた。幸村はそれを見ていた。

シャルロットの時折もれる嗚咽を聞きながらも幸村はかける言葉がなかった。

## 第七話 その男、戦場につき (後書き)

欧州編はもうすぐ終わりです！武ちゃん待ってるよー！

## 第八話ゝネタとチートでもかなわないゝ（前書き）

欧州編これにて完結です！っていうか一日のアクセスが6500PVで…正月にアップしたのより1000PV多いってどゆこと！？

## 第八話　ネタとチートでもかなわない

レスター基地に所属してからもうすでに半年がたった。あの日シャルロットの涙を止めることができなかった幸村は奮戦しレールガン、レールガン（速射砲）、ヒートサーベルのライセンス登録を行った。

だが、配備されるのは欧州国連軍及び、EU連合に所属する部隊のみに限る。日本帝国にも米国にも輸出の予定はない。これは幸村がむやみな技術の流出を抑えるためにした策で横浜にいけば更なる強力な装備の開発も可能だからだ。

シャルロットがフランス出身であるため。処置したことでもある。偽善や単なる感傷でしかないのかもしれないが。

「まさか本当に半年でライセンスまで取るとはな」

基地司令の執務室にて現在幸村とマリア司令が対面していた。横浜への転属に出したノルマはすべて達成した。あとは移動するのみだ。のみののだが…

「貴様に苦情が来ているぞ」

マリア司令も頭を抑える。

「苦情？」

マリア司令から渡された抗議の手紙を見る

「うげっ」

差出人の名前は巖谷 榮二中佐。現在進行中のX F J計画に篋唯依中尉を派遣し不知火式型と電磁投射砲の開発を行っている人物。そんなトップの人間からの抗議などそうそうあるものではないのだが…

「どうやら貴様が先にレールガンを完成させてしまったことに対する抗議文だ」

レールガン作成にあたって何も無いところから作っては怪しまれるため、欧州国連軍代表としてX F J計画の開発リストにある電磁投射砲の設計図をマリア司令自らが、開発局長である巖谷中佐にこちらに回すように依頼したのだ。

そしていつの間にか簡易派生モデルとはいえ完成してライセンスまで取ってしまったのでこちらに何の連絡もよこさないのは何事かという内容だった。

「うへえ」

「そういうわけで、悪いが貴様にはアラスカへ飛んでもらう。レールガンの完成品と設計図そして貴様とシャルロット大尉が使っているラファールのカスタム機をもってな」

「…もしかして呼ばれました？」

マリア司令はため息を持って返答する。

やりすぎたのだ。開発に難航している次世代戦術機の強化モデルを作成し、レールガン、ヒートサーベルという新武装を完成させた。



XFJ計画に喧嘩を売っているようなものだ。

「今からいったとしても時期的に考えて何かすることがあるのです？」

XFJ計画とて無能の集まりではない。不知火式型のベースは完成しているだろうし電磁投射砲とて問題はあるもののおおむね完成しているはず。

「実物を見たいのもあるだろうが、貴様が横浜に行くまでにまだ3ヶ月はある。なにかしらできることはあるだろう。それに貴様が行くだけでレールガンとヒートサーベルのライセンス問題が綺麗に収まるのだ。安いものだ」

「ひでえ」

そして辞令が渡される。真田幸村少佐、シャルロット・デュノア大尉両二名とその搭乗機、マイトガインを持ってアラスカのXFJ計画に暫定的に参加せよ。

「あれ？俺たちの所属はかわないんですか？」

「横浜に送ってはやる、だが貴様はまだ私に借りがあるだろう？」

ニヒルな笑みをうかべるマリア司令。戸籍の習得、軍属への配置、レールガン作成にともなうバックアップ。あげればきりが無い。

「つまり司令直属のままアラスカやら横浜へ転戦せよと」

「わかってるじゃないか」

「へにゅっ」

力なく頭をたれる幸村。まあ香月副指令よりはましかもしれない。

「第4計画のほうも頼むぞ」

「了解しました」

欧州国連軍の中でもマリア司令はオルタネイティブ第4計画推進派であり、実際香月副指令と面会した事もあるそうだ。すでに幸村たちの受け入れの話もついていたのだ。

ちなみにマリア司令に横浜行きの真の理由を聞かれ、オルタネイティブ計画の話をしたとき幸村は死を受け入れたという。

さておき、執務室を退席した幸村の顔は青かった。

「イワヤチュウサコワイイワヤチュウサコワイイワヤチュウサコワイイワヤチュウサコワイ」

抗議文を送ってくるくらいだから相当怒っている筈だ。そんなところに行くなんて正気の沙汰ではない。

「ハッ！？しかし唯依姫に会える！？中佐ってしかも日本じゃね？おっしゃー！！これで勝つる！」

ユウヤなんちゃらかいいう小野Dがいたはずだがまあ大丈夫だろう。やっぱり日本人は捨てがたい。

「待つてろよ！唯依姫！！君の強化装備を破るのは俺だぜ！！！」

スキップしながら鼻歌を歌い華麗に進みだす幸村だが、すぐ右に曲がると極上の笑顔をしたシャルロット姫がおりました。笑ってるけど目が笑っていない。

「H A H A H A ! やあシャルロット君。訓練はどうしたのかね？」

「(2017) ...」

無言の笑顔。

「サーセンしたああ！！！！！！！！」

土下座をかます。幸村。土下座して数分。だがなんら変化は訪れない。恐る恐る顔をあげると

「ふべらっ」

頭を踏まれて押さえつけられた。さすがに上官に対してこれいかに？

「なんで土下座されてるのかわからないなあ」

抑揚のない声。

ひい！！

「やっぱり日本人が良かった」

シャルロットさん！そこは声に出してません！！

「声に出さなければいいのかな？」

足に力が入る。ガッツリ地面とKISSです。それに思っただけなら自由だよな！？

このシャルロットさん意外と？独占欲が強いのです。

「あつちでO H A N A S H I しよつか」

「ちょ！？それネタがちがつ！？」

シャルに引きづられながら幸村は死を受け入れたとさ。

第八話　ネタとチートでもかなわない　（後書き）

次はT Eにちよつとだけつかります。でもメインはオルタですから  
すぐに抜けますよ

第九話くその男、来襲すく（前書き）

TE編、始まります！

## 第九話 その男、来襲す

現在、ユーコン基地司令と会談中の幸村とシャルロット。

「こちらに非があるといえ少し、やりすぎではありませんかな？」

基地司令の言葉に思わず小さくなるシャルロット。だが幸村は涼しい顔だ。

「ユーコン基地は問題児が多いと伺っておりましてね、離着陸時に不審な動きがあれば独自で対応させていただと最初はお話していたはずです。結果、その通りになった。それだけのことはありませんか」

トータルイクリプスは詳しいわけではないが、数ある二次小説を読んでいた幸村はユーコン基地で何かしらトラブルがあると踏んでいた。それが正史によるものかどこかで呼んだ二次小説だったのかまでは覚えていないが。

事の顛末を話すと、着陸態勢に入っていた幸村たちの輸送機から100mと離れないところで二機の戦術機がCPの再三の停止命令にも応じず模擬戦闘をしていた。

このままではやっかいだと判断した幸村がマイトガインに搭乗し命令違反の二機を撃墜した。それも圧倒的にかつ威圧的に。

「CPよりアルゴス2、すぐに戦闘を停止せよ、付近を輸送機が旋回中だ。停止せよ！アルゴス2！！」

「むこうがやめねーんだ！このままじゃ落とされちまうっつの！」

タリサは通信をOFFにする。本来は来客である幸村らを歓迎するためにアルゴス小隊とイーダル試験小隊で模擬戦闘を行う予定だったのだ。

だがタリサが挑発をかねて部隊がそろっ前に相手の機体をロックオンしたため、そのまま戦闘が勃発。お互い模擬戦闘武装だが、Su-37のモーターブレードなどはそのままなので危ないのだ。

「あいつ、なまいき」

「実力の違いを見せてやる」

イーニヤとクリスカ、ソ連の少尉である2名。こちらも熱くなり周りが見えていない。見えていたとしても言う事を聞くようなタイプではないのだが。

ACTVとSu-37は目まぐるしく体制をいれかえつつも激しい攻防を繰り返す。だがそれも長くは続かなかった、突然オープンチャンネルで謎の言葉が飛び交った。

「愛の翼に勇気を込めて、回せ正義の大車輪！ 勇者特急マイトガイイン！ ご期待通りに只今到着」

バーンツ！という効果音がとても似合いそうなくらいに威風堂々と輸送機の上でポーズを決めている異色の戦術機。そしてノリノリの中の衛士の声。

思わぬ搭乗にACTVもSu-37も一瞬動きが止まるがすぐに無



視を決め込み戦闘を再開した。

「よし、警告はした。さて、泣かしてやるか」

「ほどほどにな、幸村」

幸村の黒い笑顔に思わずあきれるシャルロット。やれやれといった感じのガイン。

ブースターを吹かし一気に戦闘をやめない二機に接近。SU-37が距離をとろうと下がるが

「遅い！」

SU-37の右足を掴み力任せに地面に向かって投げつける。そんな思いもよらぬ攻撃に振り回されながらも着地に成功するSU-37。だが、上を見ると先ほど自分たちとほぼ互角に戦っていたACTVが両手両足と跳躍ユニットを切り落とされ無残にも落下し始めているところだった。

「そんなバカな！」

おもわず声をあげるクリスカ。癪だがあの衛士の腕は悪くなかった。奇襲とはいえ自分たちと互角に戦っていた衛士を瞬殺。それもどうやったのか確認するまもなく。

「さあ、楽しませてくれよ！」

オープンチャンネルでの挑発。

「なめるなっ!!」

「クリスカ、だめ!」

イーニヤの静止も聞かずペイント弾をばら撒く、

「みえみえなんだよ!」

あっさり回避する、マイトガイン。だが反撃は来ない。

「射程距離外からだと? 意外とセコイ手を使う奴だ」

またしても挑発。

「ならばお望みどおりひき肉にしてやる!!」

完全に頭に血が上っているクリスカ。モーターブレードを展開し突撃する。猪突猛進ここに極まれり。

「踏み込みが足りん!」

動輪剣でモーターブレードを切り払う。そしてS u - 37を蹴り飛ばし距離をとる。すかさず落下してきていたA C T Vの胴体をキャッチし地面に下ろす。だが、

「しばらくそこでおとなしくしている」

明確な殺意を向け、A C T Vの官制ユニット部分を踏みつける。そして形を歪ませベイルアウトを不可能にする。その光景におもわず息をのむS U - 37。

「ばかな…衛士を殺す気なのか!？」

「お前たちは無力な輸送機を殺すところだったんだ、それも事故に見せかけてな、薄汚いやりかただ」

「なっ! 私たちはそのようなことは!！」

「再三の停止命令を聞かなかったような連中の言葉を信じると思うか? この工作員かはしらんがここまでだ(ガイン、怪我させるなよ)」

幸村はもちろん中の衛士がだれか知っている。だがあえてこちらが勘違いしている風を装い、懲らしめてやることにしたのだ。

マイトガインは背中の後付担架から一丁の銃を取り出す。それは幸村が開発したレールガン。威力Ver

「クリスカ、はやくあやまろう、でないとおこられるよ、すっごく」

イーニヤは幸村の心を読んだのか割と落ち着いている。相手が本気でない事を知っているのだから。

「だが、このままで…うわっ!？」

クリスカとイーニヤの会話をよそにレールガンを発射。両腕、両足を吹き飛ばし地面に転がるSu-37。

「状況終了、基地司令につないでくれ、お仕置きは完了だと」

そして冒頭の会話につながるというわけである。結果お咎めはなしだが、壊したACTVとSu-37の修理と強化の案を何か無償で提出するようにとマリア司令からお怒りの通信をいただいた幸村だった。

「うわーん！ シャルー！ おばはんにいじめられたぁー！」

「言わないほうがいいよそれ」

「うぼっ！？」

どこからかレンチがナイフスルーで飛んできたそうなの。

第九話　その男、来襲す（後書き）

その名はエリート兵。だが後悔はしていない。

第十話　ネタとチートをもって相見える（前書き）

武ちゃんがでてこないー

## 第十話　ネタとチートをもって相見える

「挨拶が送れて申し訳ありません！中佐殿！！」

バシッと敬礼を決めてみせる真田幸村。だが心なしか顔は青い。

「いや、わざわざ呼んだのはこちらなのにいきなり危険な目に会わせてしまつて申し訳ない」

答礼してくるヤクザな見た目のナイスダンディ、巖谷 榮二中佐。基地司令との会談の後司令から巖谷 中佐の下に行くように命令されたのだ。幸村涙目。だが行くしかなく泣かされるのを覚悟でここに来たのだ。

「予期せぬハプニングはあったが、見せてもらったよ“君の”作品をね」

ジロリと幸村を睨む巖谷中佐。（本人はいたって普通に見ただけ）

「いえ、あれが完成したのは日本帝国の、ひいては巖谷中佐殿の開発された電磁投射砲あつてのことでありますので」

「謙虚だな、こちらが難航していた電磁投射砲の小型化を成功させ、尚且つ派生モデルまで完成させたというのに」

「小型化の成功はあくまで電磁投射砲の性能を二分にしたための副次的なものでしかありません、派生モデルといつても二つでひとつの半端な兵器であります」

言葉使いも、姿勢もマリア司令とは段違いに丁寧な幸村。このような姿はそうそう見れるものではない。それはさておき

「実物を見せてもらって確信したよ、あれはすでに完成したものだ。 unnecessary 謙虚は嫌味になるぞ？真田“中佐”」

「は？今なんと？」

巖谷中佐は今までの気難しい雰囲気をやめ、笑顔で（それでも怖いが）幸村に辞令を渡す。

「真田幸村、レールガン、ヒートサーベルの開発の功績により現時刻をもつて中佐階級とする」

巖谷中佐から渡されたのは幸村の中佐への特進の辞令だった。

「しかし素晴らしいな、君の開発したレールガンは、下手をすればこちらの電磁投射砲よりも使い勝手がよいかもしれんぞ、それに戦術機からの電力供給という発想も悪くない」

フランクな態度になった巖谷中佐、幸村もなんと思考を戻す。

「ありがとうございます、ですが、問題はいろいろとありましてね。再充電時の想定以上の電力消費や燃費効率の向上など問題もまだ多い。」

「ヒートサーベルと言ったか？あれもかなりのものだ、剣の耐久力を挙げつつ切れ味と使い勝手の向上、開発局の人間としても尊敬するよ」



「ですが、日本人にはあまり好かれないうもしれませんね」

幸村は苦笑い気味に答える。日本人は長刀を使う。本来使い方が難しく剣術を学んでいなければ長刀の本質は發揮できない。だが日本人は長刀を使う。刀を連想させるその形状は日本人を象徴する代名詞的なものにまでなりつつある。

刀に思い入れの強い日本人だからこそ西洋風を思わせるヒートサーベルは受け入れられずらいだろう。もっとも欧州以外に配備される事はないのだが。

だが2001年のこの時代に74式近接戦闘用長刀という20年以上も前の技術で作られたものを使っている辺り日本人の頭の固さが伺える。

「このXFF計画を疑問視する輩もいるほどだ、日本人とは融通の利かない人種らしいな」

笑い気味に巖谷中佐は話す。

「そうだ、ついだから紹介しておこう」

（きた！？これは…きたか！！！！）

「わたしだ、至急執務室へ来てくれ」

通信でなにやら話していた巖谷中佐、おそらくこの人の性格からして呼ばれた人物はただひとり。

(フッフ…)

思わずにやつく幸村。

「グッ!?このプレッシャーは!?!」

「どうかしたのかね?真田中佐?」

「…いえ、なんでもありません」

うかつな事をすれば死ぬ…プレッシャーがそう言っている。

「失礼します、叔父様、急に呼び出すなんて…な…に」

幸村と目があつたのは美しき大和撫子の唯依姫こと篁 唯依中尉。

唯依姫は顔を赤くして慌てて敬礼をする。

「もつもつしわけありません!お話中とは知らず」

「いや、かまわないよ」

幸村は唯依姫を見る。うん。実に美しい。いや美しすぎる。

「紹介しよう、現在不知火式型の実験部隊を率いている篁 唯依中尉だ」

「よろしくおねがいします」

凜と敬礼をする唯依姫。だが幸村は聴いちゃいなかった。

「まさか…これほどまでに美しいとは…」

思わず声に出しやがった。

「はっ！？ああああの…中佐殿！？！？」

真っ赤になる唯依姫。ほう、とうなずく巖谷中佐。ちなみに唯依も幸村が中佐になっていることは巖谷から聞いて知っている。なので階級証は少佐なのに中佐と呼んでいる。

「ぬっ！？これは失礼した。斯衛の女性は美しいと噂は聞いていたのだが思わず声にもれるほどだったよ…」

「そ…そんな…ことは…」

後半はほとんど聞き取れないような小声になってしまった唯依姫。

「まあとにかくだ、中尉らが開発中の不知火弐型含め、期待しているよ、唯依姫」

「ひっ姫！？！？」

もうボロがでまくりです、これはもO H A N A S H I 確定だね。巖谷の叔父様は完全にニヤニヤモードだし。

「気にしないでくれたまえ、これも友好の証だよ」

内心はいっぱいいっぱいの癖に妙に偉ぶって落ち着こうとする幸村。

では、と言って執務室を出て行く、幸村。

残された二人は唯依姫が落ち着くまで巖谷中佐はニヤニヤしていた。

「どうかな？唯依ちゃん、彼は」

「少々軽い印象を受けますが、先ほど見たレールガンの派生モデルの完成度を見るとそうとうな技術力を持っているのは間違いないと思います、彼がいれば叔父様の夢もきつと」

（そういう話を聞きたいわけじゃないんだけどなあ、まあブリッジスよりは唯依ちゃんとうまくやってくれるだろうし期待したいね、真田幸村君）

巖谷中佐の笑みの意味に気がつかない唯依姫だった。

「それと叔父様？突然来客もいるのに呼び出すなんてひどいじゃないですか？」

「ねえ、幸村、ちょっとO H A N A S H I しない？」

男2名のセツナイ叫び声がユーコン基地をこだましたとかしないとか。

第十話　ネタとチートをもって相見える（後書き）

思ったよりも話数が伸びています。これが文章能力のなさなんです  
ね…

## 第十一話 その男、ちょっと怒る (前書き)

シリーズ管理の仕方がわからん…前編、中篇、後編にしたいんだが  
…

## 第十一話　その男、ちょっと怒る

地獄のような嫉妬に耐え忍んだ幸村。そう彼はまだ終わるわけにはいかない。撃墜した二人の衛士をフォローしにいかねばならない。少々やりすぎたと反省しているのだ。

ただまあ、C Pの命令も聞かず戦闘を続行し着陸態勢の無防備な輸送機にペイント弾とはいえ直撃させるわけには行かない。要人が乗っていれば銃殺されていてもおかしくはないのだから。

今回は幸村が取り計らったため、反省文だけにさせた。だが怒るところは怒らねばならないし変に距離感をもたれても困る。よってフオローに行くのだ。

ハンガーには手足を切り取られ官制ユニットを切開されたACTVと手足を吹き飛ばされたSu-37が運ばれている途中だった。どうやら中の衛士はすでに救出されてはいるようだ。

なまじ中の人間を誰か知っているため幸村は、やりすぎたと後悔するが軍隊において命令無視はやはり重罪だしここは心を鬼にしてそのボロボロになった二機の戦術機を見上げる衛士たちに声をかけるべく近づいていく。

「ごめんな…ACTV…あたしのせいだ…」

左腕を包帯でまかれつるされている小柄な少女タリサ。彼女は見るも無残になった自分の愛機を眺めて思わずつぶやく。

「タリサ、あまり気にするな」

隣にいた男が声をかける。

「そうだ、チョビがわるい」

さすればS u - 37を見ていた儂げな銀髪の少女が罵倒する。

「チョビ言つな！てめーらだって命令無視してただろうが！」

「そちらが挑発してこなければこのようなことにはなっていない」

儂げな少女の方を守るように同じ銀髪の少し目つきの鋭い女が前に出る。

「やめろ、クリスカ、その挑発に乗った時点でどちらも同罪だ」

男が仲裁に入るが、だんだんヒートアップしていきそうな雰囲気だ。

「どうやら貴様らは未だに自分たちがしたことの罪の重さがわかっていないようだな」

幸村が割って入っていく。さすがにこれでは子供の喧嘩だ。軍隊で見るとような光景ではない。まあ某いろんなロボットまぜっこ大戦の世界にいたときはよくみた光景だが。

幸村のほうを向き階級証をみるや否や全員が敬礼をする。

「俺は先ほどの輸送機に乗っていた、真田幸村中佐だ。貴様らの腕を見込んで処罰は軽めにしたのだがこのような子供の喧嘩を見せられるといっそ投獄させたほうがよかったかもしれない」



幸村の言葉に思わず身構える当事者の3人。これはまずい。影で言い合うならともかく被害者である相手の目の前で責任の擦り付け合いなど見せては反省の色が見えず本当に連行されても文句は言えない。

「空気の読めん挑発をするばかりも、そんな挑発を受け流せない余裕のないものも軍隊にはいらん。さっさと故郷へ帰れ。俺から打診しておいてやる」

さすがにここまで言われては黙っていられなかったのか、横にいた男。ユウヤ・ブリッジスが敬礼を解いて反論する。

「たしかに危険ではありませんでしたがこちらは模擬戦用のペイント弾。それを実弾でもって返すのはどうかと思いますが？ マナンドル少尉は怪我をしていますし」

「おい！ ユウヤ！」

タリサが思わずユウヤをとめる。一見タリサを庇っているように見えるが、ユウヤは幸村の顔を睨みつけている。敵意むき出しである。

「では、聞くが、そのペイント弾が輸送機の操縦席にあたればどうなる？ 輸送機の貧弱な防弾ガラスでは貫通もありえる。それにペイントがつけばどうやって操縦する」

「そうなる前に二人はとまっていたかと思えます。わざわざ撃墜する必要はないでしょう！」

さすがに幸村もこれにはカチンときてしまった。

「おい、調子に乗るなよアメ公、お前のお国じゃ命令違反して戦闘続けるやつを信じるのか？それとも半端な血筋の人間は思考も半端なのか？ああ？」

威圧的に振舞う幸村。アメ公はだめだろさすがに…

「俺がハーフだからって言いたいのかよ!!」

ユウヤはコンプレックスであるところをつかれて逆上する。まあそういう風にしたんだけど。

強化装備を着ているユウヤ、制服の幸村。そして技術仕官で赴任してきた幸村と現役衛士のユウヤ。これはまずいとばかりにユウヤを止めにかかるうとするがその必要はなかった。

「虚刀流、百合！」

回し蹴りがユウヤの腹にきまる。強化装備のためダメージはないと見ていたが、

「グハッ！」

思わず息を吐く、

「虚刀流、薔薇」

よろめいたユウヤに体重の乗った飛び蹴りをかます。吹き飛ばすユウヤ。だがまだかるうじで立ち上がる。

「くそっ…」

「これで終わりだ、安心しろ、俺は別に貴様のことが嫌いなわけではない、もちろんアメリカもな、これは修正だ上官侮辱へのな」

幸村が構える。周囲の人間は幸村の放つ圧倒的な威圧感に飲まれて動けない。

「虚刀流奥義、柳緑花紅！」

見た目はただの正拳突だが、その一撃でユウヤび意識は刈り取られた。崩れ落ちるユウヤを受け止める幸村。その圧倒的強さに恐れながらも魅了された当事者たち。

「ここまでするつもりはなかったんだがな、やれやれだ…正式な配属は明日からになるんだが、マナンドル少尉、腕のほうは大丈夫なのか？」

「はっはい！全治3日と聞いております」

敬礼をもって返すタリサ。

「そうか、それはよかった。それとソビエトの二人、情けないと思え、貴様らの末妹は極東の地で一人で頑張っているというのに」

「っ！？」

思わず反応する2人。貴様らの、というあたり幸村が自分たちのことを知っていることになる。そして末妹、つまり自分たちよりあとの世代の妹が極東の地にて一人でいるのだと。

「それは本当なのか？中佐！」

クリスカが睨むように幸村に詰め寄ろうとしたが、できなかった。  
幸村の放つ威圧感に

「勘違いするな、小娘、俺は貴様の保護者でも近所のお兄さんでもない。口の利き方もわからんガキに教えてやることなどない」

「ぐっ…」

口ごもるクリスカ。

「だが安心しろ、明日からの教導の内容次第では合わせてやる」

そう言つて幸村は歩き出す。するとようやく幸村の威圧感から解き放たれたメンバーはユウヤを担いで医務室へ連れて行く。クリスカとイーニヤは幸村の去つて行つたほうを見ている。

「必ず…必ず会いに行く」

「うん、がんばろうね、クリスカ」

ソビエトの紅の姉妹の物語はここから始める。

「フォローにならんかった…」

つとシャルロットの膝に泣きつく幸村。その出来事を後から聞いた唯依姫が全力疾走で幸村に誤りに来たことも言うまでもない。

## 第十一話、その男、ちょっと怒る（後書き）

まさかの虚刀流です！ですがオリジナルには遠く及びません。経験で使える程度ですよ

## 第十二話　ネタとチートでまじめに教導（前書き）

やはり感想は少ないな、まあクロスものはしかたないな。でもPVとユニークはえらい勢いで伸びてる…ありがたい事です。

## 第十二話　ネタとチートでまじめに教導

シャルロットに泣きついている姿を唯依姫に見られかけてしまったが、なんとか見られずに助かった。

ノックも無しにスライディング土下座もかくやという勢いで入ってきた唯依姫に、思わずあっけにとられる幸村とシャルロットだったが、唯依姫の誠意ある対応に思わずこちらが畏まってしまう。

そんなハプニングもあつたが翌日になり幸村の教導が始まった。

だがなぜ技術仕官である幸村が教導するのか？その教導する内容は？

「っというわけで、現在お前たちが行っている不知火式型の調整のついでに、俺が持ってきた新武装を弐型やACTVなんかとのマツチングを見て欲しい」

ブリーフィングルームで欧州から持ってきたレールガンと速射砲、ヒートサーベルの説明を行っている幸村。巖谷中佐にこれらのデータを渡しているので実際はもうすでに幸村の任務は終わっているのだが、どうせなら実戦形式で新武装の扱いを教えてやってくれと巖谷中佐に頼まれたのだ。

「あたしはこのレールガン気に入ったぜ」

全治三日の診断なのだがすでに包帯を取っているタリサ。新武装と聞いて黙ってみているわけにはいかないとはしゃいでいる。

「この速射砲：スペックだけなら現行の突撃砲の倍近いな…」

タリサの隣にはユウヤがいる。昨日のことで気まずさはあるかもしれないが、修正を受けそのことを幸村が何も言わない（半分もうどうでもいいだけ）ので資料に目を通す。

テストパイロットなのでやはり惹かれるものはあるのだろう。

「中佐、このヒートサーベルという武装は我々のF-15Eでも使用は可能なので？」

美しい彫刻のような風貌のステラ・ブルームル。彼女の疑問もわからなくはない。アメリカの機体には接近戦の概念は薄い。戦術機をG弾の梅雨払いにしか考えていないからだ。BETA相手に物量で戦おうっていうんだから大したもんだ。

「多少は可能だ、さすがに日本製の戦術機と打ち合えば刀身の前に腕の駆動部分が逝ってしまうだろう、その辺りもデータを取らせてもらおうか、後々の改造に役立ちそうだ」

「ヒューー これなら俺でもサムライ気分だぜ」

ラテン系の男、あえて名前は言わないがVG。彼はお気に召したようだ。

「ではこれらの装備を各自ためしてみてくれ、デユノア大尉、あとはよろしく、篁中尉はこちらに来てくれ」

「ハ…ハッ！」



一瞬敬礼にどもった唯依姫、心なしか：顔が赤い？そりゃあいきなり美しいだ姫だなんて言われたら意識はしちゃうよねー

そんな唯依姫を見つめる男、ユウヤ。ついでに幸村を睨む。いや見ただけなんだけど。

「中佐？あまりハメを外さないようにお願いしますね？…ね？」

大事な事なので二回言いました。

「う…うむ。やましいことなんてないんだぞ！？」

天使の笑みは怖いです。

幸村と唯依姫はブリーフィングルームを出て行く。そして少しばかり空気が軽くなった。シャルロットの癒し系オーラがなせる業だ。

「それじゃチームに分かれて2on2で模擬戦やるよー、その後は僕と個人的に模擬戦ね！とくにブリッジス少尉は中佐に食って掛かるほど勇敢らしいから楽しみだなー」

「…まさかな」

思わずため息を吐くユウヤ、シャルロットの笑顔の下の怒りに気がつかぬほど鈍感ではない。

「中佐と大尉がそんな仲とはねー、ユウヤご愁傷様」

ニヤニヤと首を振るVG

「可愛らしい外見ほど中身は獰猛なのよ？ユウヤ」

「うるさい、VGにステラ」

「えっ？えっ？なにになに！？」

タリサにはまだ早かったらしい。

「ちなみに大尉のはどんな機体なので？まさかあのタリサたちを撃墜したやつで？」

VGがまたあれが見れる！と言わんばかりの声でシャルロットに詰め寄る。

「あはは、あれは機密だからシミュレーターでは使えないよ。持ってきたリヴァイヴを使うよ」

「たしか中佐と大尉が独自に改造した欧州のラファールのカスタム機でしたか」

ユウヤが思い出すように話す。こちらにも興味が沸いているのだろう。

「そう、ラファールリヴァイヴカスタム？。もう改造しすぎて原型あんまりとどめてないけどね……」

うれしそうに話すシャルだが後半は少し疲れたような顔になる。シャルロットにしては珍しい光景である。

「何か…あつたんですか？」

ステラが遠慮がちに尋ねる。

「中佐がまだ改造しようとしてね…とまらないんだ」

「とまらない…とな」

VGも少しあきれたという表情をする。過度な改造はパーツの相性やストックの問題からご法度とされるが幸村はとまらないという。ハンガーにあるラファールリヴァイヴを見ても大概なのにまだやめないとなると…

「寝てる間に改造しようとするからもう大変だよ」

「お気の毒に…」

シャルロットの疲れた顔に思わず同情するステラ。

「すっげー！すっげー！あたしのACTVも改造してくれねーかなあ？なあステラってば！」

喜んでいるやつもいる。きっと横浜の突撃前衛長もきっと同じタイプだろうとここに断言する。

「真田幸村か…技術仕官とは言えあの年で中佐、きっと衛士としての腕も相当だろうな…」

おもわずユウヤは唯依姫と幸村が消えたほうを向かってつぶやく。いちテストパイロットでしかない自分と、数々の新武装を生み出し未だとまらずに前に進んでいる幸村（ちょっと良く言いすぎ）に

嫉妬のような感情を向けるのであった。

## 第十二話　ネタとチートでまじめに教導（後書き）

そう長くせずTE編が終わります。微妙に時間軸が狂ってますが許してください。

### 第十三話　その男、懲りない（前書き）

作者はユウヤが嫌いではありません。ですがオリ主ものの定めというか…まあこれはオルタの世界の話なのでユウヤは主人公ではありません。TEファンの方にはもうしわけないです。

### 第十三話　その男、懲りない

ラファールリヴァイヴと不知火弐型が鏢迫り合う。ヒートサーベルから火花が散りギリギリときしむ音を上げる。だが徐々に弐型が押されていく。

「弐型がドッグファイトで押されるのかよ！」

たまらず後方に下がり、距離をとって速射砲を放つ。

「まだまだ機体性能を発揮できていないだけだよ」

ラファールは速射砲を避けながら左手の二連装の内蔵型36mmで弾幕を張る。性能面ではたしかに幸村が改造したラファールに軍配があがるが、不知火弐型とて負けてはいない。跳躍ユニットやOSなどで差が出ているに過ぎない。

ラファールの固定武装が嫌なのか不知火弐型は距離を詰めれずにいる。

「固定武装がこれほど厄介とはな」

ユウヤもテストパイロットとしての腕は一流である。ラファールの弾幕を掻い潜り速射砲を撃つ。

（やっぱり戦い方が不自然だ…付かず離れずといえは聞こえはいいけど間合いが中途半端、幸村の話じゃ日本製の戦術機はもっと接近戦に長けてるはずなのに）

「くそ！何であたらない！！」

しっかりと速射砲のレンジ内で戦っているにもかかわらず一向に掠りもしない貳型の攻撃。

「次の噴射の切れ目で…」

貳型が跳躍ユニットを単発噴射して左右に逃げるがユウヤの動きが単調になり始めたそのとき。

「決める！」

シャルロットの読み通り、少し大きく噴射した後の着地時の硬直を狙われ一気に押し込まれる貳型。

なんとかユウヤもヒートサーベルで応戦するも三度目の鏖迫り合いの瞬間に

「官制ユニットに被弾、衛士死亡、状況終了」

CPの声が聞こえ、シュミレーターが終了した。

「やはり左腕の固定武装か…」

出てきたユウヤが先ほどのリプレイを見ながらつぶやく。

「ありゃあ完全に狙われてたな、まあ気にすんなよ、俺もタリサもそれでやられてんだ」

VGがユウヤに気遣いの声をかける。ちなみに初戦のタリサは一発



目の鏢迫り合いであえなく。二戦目のV Gは接近射撃にて蜂の巣に。三戦目のステラは距離をとって射撃戦にもちこんだがレールガンの扱いに長けるシャルロットにあえなく吹き飛ばされた。

「ブリッジス少尉についてはしかたがないかもしれないね」

シャルロットがシュミレーターから出てくる。

「どういう意味です」

ユウヤ君また怖い顔。

「機体の性能をまだ限界まで引き出せてないんだよ、引き出せてないと言うよりはブリッジス少尉の戦い方に式型が合っていない」

「俺はアメリカ兵ですからね、射撃が性分なのはわかります。それでも最近はこの式型の扱い方がわかってきた。どうすればこいつがうまく動くのか、それは機体性能を引き出せてるってことじゃないんですか？」

「少なくとも射撃戦に至っては式型の性能を十分に引き出せていると思う、けど日本製の戦術機の特徴である接近格闘が生かされてないんだよ、だから射撃と格闘のメリハリがなくてすべてが中途半端な攻撃になる。…自覚あるでしょ？」

シャルロットの言葉に言い返せないユウヤ。そう、最近式型をうまく使えるようになってきた。だが最近になって戦いにくくなったのも事実なのだ。近づいて切る、離れて撃つ。その動作がひどく散漫な気がしていた。

「言いたい事はわかります。ですがそれでは答えになっていませんが」

つまり何がいけないのかわからないのだ。

「僕に言えるのは長刀を使った接近戦での思い切りが不足してるってところくらいかな、それ以上は自分で考えないと強くなれないよ」

「思い切り？」

シャルロットの言葉を思わずオウム返しするユウヤ。

今は昔ほど接近戦を軽視することなどなくなった。本気で斬りかかっているし接近格闘の訓練もしている。ならば思い切りとはなんだ？

「それじゃあ今日の訓練はここまでにしようか、各自新装備のレポートよろしくね」

「ハッ！」「」

敬礼する3人。だがユウヤは考え込んでいた。

ステラが注意するがシャルロットが気にしないと云ったのでそのままお開きになる。残されたアルゴス小隊のメンバーはチームのスコアラであるユウヤが考え込んでいるのに声をかけられないでいる。

「デユノア大尉って何が言いたかったんだろうな？あたしにはさっぱりだよ、ユウヤの突っ込みは悪くなかったと思うぜ？」

タリサは声をかけるが

「きつとメンタルな部分の事だろう、デュノア大尉は真田中佐と一緒にだから日本人的な考えなんじゃねえの？」

V Gが続き

「そうね、意味ありげなことを言ってるけれど本当にそこまで深い意味はあるのかしらね」

いつになくステラも不満気に話す。負けたのが悔しかったのだろうか？

「きつとあるんだろう、俺にはわからないが」

最後にユウヤが締めくくり解散となった。

一方その頃。

「ゆ…篁！まだその程度で終わると思うなよ！」

こちらも教導を行っていた。だがあまり訓練に身が入っていない唯依姫。なぜなら唯依姫の名前を呼ぼうとする際に毎回今のようにとどもるのだ。

「中佐…個人的なときはもう唯依でかまいません」

顔は赤いがこれでは訓練にならないと唯依姫は妥協した。だがしかし嫌ではない。

「むっ？では唯依姫と呼ばせてもらうぞ、俺も幸村でかまわない」

「では…幸村さんで…」

りんごのようになってるのはご愛嬌だ。普段の唯依姫ならこのようなことはないのだが幸村には少々頭が上がらなくなっている。なぜなら恋もしたことのない乙女な唯依姫に、いきなり自分を姫扱いするイケメン　これ重要　が現れたのだ。乙女心を揺さぶられては唯依姫とてたまらない。

それにもともとユウヤといい感じになりかけていたのもある。

その後。

「楽しそうだね、幸村」

「まっ！待つんだ！俺のシャル！！うつ腕の関節はそっちにはまが…（ry）」

第十三話　その男、懲りない（後書き）

TE編もそろそろ後半にはいつてきています。  
…多分。

第十四話　ネタとチートが教えます　（前書き）

唯依姫のターン!!

#### 第十四話　ネタとチートが教えます

シャルロットがユウヤ達を教えている間、幸村は唯依姫を教導することになっていた。唯依姫が可愛いから二人きりになりたかったわけではない。わけではないのだ。

それもX M 2、3を使った教導である。

「これは…思っていた以上に戦術機が思うように動く…すばらしいです！！中佐！」

唯依姫も最初は先行入力とキャンセルに戸惑っていたが、X M 3ほどの即応性がない今、それなりにマイルドな扱いになっている。練習にはもってこいだろう。

シュミレーターにX M 2、3をインストールするわけにはいかないのだから実機訓練となったがそこは非凡なる我らが唯依姫。出撃時に左肩をぶつけた以外なんら問題ない。

「先行入力とキャンセル…この概念でこれほど柔軟な対応ができるんですね」

「ああ、これでさらにCPUの性能が上がればアクロバットな機動だってできるはずだ」

ちなみに今、幸村はシャルロットのラファールに。唯依姫は幸村のラファールに乗っているが二人のラファールはいじりすぎて出力特性がおかしなことになっているので跳んだり撥ねたりはしていない。

「アクロバット…ですか？そんなことして意味はあるのですか？」  
もつともな意見の唯依姫。この世界で空を飛ぶ必要などないのだから。

「それにこの機体の跳躍ユニットと言いますかスラスターですか、これは空中での戦闘を想定している設計にしか見えません。この機体を利用すべき戦域が見えないのです」

「質問攻めだな唯依姫、質問の答えはこうだ、この機体は限定空間内での飛行戦闘を想定している」

「限定空間内での飛行戦闘…そんなことができるのは…」

唯依姫もそれがどこなのか見当がついたらしく思わず目を大きくする。ああ！抱きしめたいな唯依姫！

「おしゃべりはここまでかな、さあせっかく日本人の、しかも斯衛の人間に乗ってもらってるんだ。ひとつ手合わせを願おうか」

背中からヒートサーベルを抜き出す幸村。

「わかりました、お相手仕ります」

唯姫もヒートサーベルを取り出す。模擬戦なので震動も熱も出さない。

「いくぜっ！」

切りかかる幸村のラファール。それを受け止める唯依姫のラファール



ル。

「思ったよりも頑丈のようですね」

「そいつが売りだから…なっ！」

まるで剣舞を踊るかのような打ち合いをする二人。だが幸村の無骨な動きに比べ唯依姫の動きはたとえ武御雷でなくとも洗礼されていて美しい。

「人肌と変らぬ動き…これならいける！」

唯依姫のラファールが踊るような動きから一閃して鋭い鋭角的な動きに変る。突き、切り替えし、なぎ払い。その動作に無駄がない。

「くう…武人が使うとここまで化けるか…」

「そこおっ…！」

「当たりはせんよっ！」

ラファールは長刀の使用を想定されて設計されているが日本製ほどではない。欧州の兵士にも騎士を自称するものもいるがそれはどちらかといえば、精神的なもののほうが大きい。

「くっでも少し…剣がぶれるというの!？」

「なんとおおおおっ…！」

思ったところに行くのだが詰め切れない。X M 2・3はなくとも武

御雷の性能の高さが伺える。と唯依姫は思っていた。

「そこだなっ！」

唯依姫の一瞬ぶれた太刀筋を戻そうとした間を幸村が詰めて切り裂く真似をして、試合終了。

「参りました」

「いや、危なかったよ、XM2-3がなかったとしてもやっぱり日本製の戦術機にチャンバラは避けないとな」

「いえ、戦場で刀だけで切りあうなどそんな状況はありません、これに幸村さんのレールガンやこの機体の全力機動が加わればきっと武御雷であつても現行のままでは追従できないでしょう」

感心して幸村を見つめる唯依姫。ちよつとちよつとなんか視線に熱が籠っていますよ！？

唯依姫きてます。きてますよ！！できる男にきてます！！

「そう言ってくれるとうれしいね！俺の機体も唯依姫に乗ってもらって幸せだろうさ」

「これは中佐の機体ではなかったのですか！？てつきりシャルロット大尉の機体だとばかり……」

「いやあなんとなく……な、唯依姫に扱って欲しかったんだ」 あとで、くんかくんかするため。

「そういつてもらえてうれしいです、雪村さん」

また一掃熱っぽくなる唯依姫の視線。

「…チェックメイト!」

モニターに移らないところで親指を立てる雪村。あとでシャルロットにチクってやろう。うんそう決めた。

「電波がチクんなよ!?!」

「中佐!?!」

「あついや、なんでもない。それじゃ戻ろうか」

基地に戻る中唯依姫は思わず、完成ユニットの中で

（これが…中佐の匂い…ハッ!?!わたしったらなんてはしたない!?!）

先にくんかくんかされていた。

（やっぱりシャルは良い匂いだあ）

こっちもやっていた…

ハンガーに機体を戻しタラップを歩く二人。

「さて…疲れたしデブリは明日にするとしよう」

「了解しました」

タラップで分かれる二人。唯依姫がいなくなるのを確認し、機体に戻る雪村。

「ふふふ…これだけは譲れんよ…これだけはな…」

整備兵にもまだ絶対に障るなと厳命してある。あの中にはまだ唯依姫の香りがいっぱいのはず。

「もうすぐ…もうすぐだ…」

あとは開閉レバーを開くだけ…だけなのだが。そこには天使がおりました。

「…（にこっ）」

「…（にこっ）」 冷や汗MAX

そのあと雪村の姿が3時間ほど閉鎖空間に落ちたそう。

「…ミッ…ミッションコンプリート」

だがこの男。あきらめてはいなかった。

第十四話　ネタとチートが教えます（後書き）

フラグどころか…唯依姫ルート！？

## 第十五話 その男、多忙につき（前書き）

TE編も終盤です。ほんと何しにアラスカにきたんだ…もっとうまく構成できるようにしたいです。

## 第十五話 その男、多忙につき

我らが唯依姫といちやいちゃくんかイベントを終えた幸村。正直アラスカくんだりまで飛んできたがここでできることというのはそれほど多くなかったりする。

何か新規開発しようにもレーザー対艦刀や現在開発中のプラズマ砲（サーマルガン）を組んでいくには香月印の高性能コンピュータが必要だ。もの自身は作れるがそれを制御する戦術機側の処理速度が追いつかないのである。

武装とは銃であったとしても単純に引き金を引けばいいというものではない。戦術機などの高性能な人型機動兵器は照準やレティクル、リコイルを自動で行う。つまり銃を撃つだけでもCPUを使用する。それをレーザー対艦刀やプラズマ砲、荷電粒子砲などのエネルギー兵器として利用しようとなるとそれらの武装のコンディションやらエネルギー効率やらと複雑な仕事が増える。

そして粒子兵器というのは取り立ててその利用スペックが高く、高性能な演算能力が必要とされる。

00ユニットも粒子コンピュータだからね。まああれほどではないんだけど。実際、香月博士ならお門違いとはいえレーザー兵器くらいなら作る事ができる。忙しいしめんどくさいしお門違いだからしないだけだね。

というわけで、取り立ててすることがない幸村。ユウヤたちはほつておいても勝手に強くなるだろうし、シャルロットの見立てでは新

武装も問題なく使用できている。

式型にも搭乗して、感觸を確かめ、いずれ白銀武が駆るにふさわしい魔改造の母体としては十分なできだった。

あまり唯依姫とエスケープするとシャルロットに切り落とされるので、唯依姫もあわせてシャルロットに教導を任せている。だが横浜についてからは色々と戦力増強にやりたいことがあるので副官がシャルロットだけでは手が回らなくなる可能性もある。

「なんとか唯依姫つれていけねーかなあ」

ぼんやりとデスクのモニターに向かって話しかける幸村。彼女は開発局の人間だし腕もある。人柄も悪くないし仕事熱心。そして唯依姫だし。言いたいだけ。

「唯依ちゃんをどこに連れて行く気なんだい？」

幸村が振り返ると、そこには思わず男も虜にするほどの素晴らしい笑顔の（でも怖い）ヤク…巖谷中佐がサムズアップでいた。

「不法侵入ですよ」

「俺のパスで入れたんだがな」

「ぬう…」

巖谷中佐は電磁投射砲の運用について幸村の意見を聞きに来たのだが、なにやら部屋に入ったとたんに幸村がつぶやいていたので叔父様センサーが発動して今に至る。



「あつ、いえ、有能な副官が欲しくてですね」

「シャルロット君では不満なのかね？」

「いえいえ、シャルは有能すぎます。でもあいつには俺と同じ開発側にいて欲しいんです。これから忙しくなっていくだろうから雑務や整備班とのパイプになるひとが欲しいんですよ。」

「たしかに唯依ちゃんなら雑務はきちんとこなすし人当たりも良いから、整備班とのパイプもうまくいくし陣頭指揮だつてとれるからね」

うんうん。と腕を組んでうなづく巖谷中佐。

「そうなんですよねー、唯依姫ほど有能な人物ってなかなかいないくて」

「いやあ、そこまで言われると鼻が高いね。だが君たちの次の赴任先は……」

そこで巖谷中佐の表情が強張る。そう何かと黒い噂が絶えない。横浜基地。唯依姫は斯衛だしそうそうに通せる話ではない。

「横浜基地……だからきびしいですよねー。あそこ印象悪いからなあ」

そう言ってモニターに向かう幸村。本来なら失礼な行為だが、巖谷中佐が急に押しかけてきているので見られてはまずいデータを隠す。

「あーっ！この設計図ここに入ってたのか！！なくしたと思ったのに」

以前、ネタで考えた新型機の設計図だ。することがないのでデータ整理をしていたのだ。

「よかつたら教えてくれないかな？機密に関することではなければ」

巖谷中佐が声をかける。この人も開発局の人間なのでレールガンを独自に開発させた幸村の技術や発想には興味があるのだろう。

「いつすよー。まあネタで考えたんですけどねー」

そこにはキャタピラの上にF-4の上半身をくっつけ、さらに両肩にはかなり長い砲身を乗せた戦車と戦術機の間のような映像があった。もちろん腕はガトリング仕様。

もちろん元ネタはガ　タンクだよ！

「これは…戦術機なのかい？」

「いえいえ、衛士に乗せるには鈍重すぎてもったいないです。コンセプトは戦車兵に夢と希望と戦場を。です。」

幸村がふざけて見せるが巖谷中佐は大真面目にモニターを凝視している。

「つまりこれは戦車兵が扱えるように製作しているのかい？」

「そつすね、戦術機みたいに飛び跳ねるわけじゃないんで、適性検

査に撥ねられた人間でも使えるようにしてますよ。火気官制なんかは戦術機のを併用してますから、コストも安い」

「実用化の目処は？」

「基本的に二人乗りですからね、その辺りの調整がまだなんです。今のままじゃ機動と火器官制の二分化が難しくて。どっかに複座型とかありやあ進むんですけどね」

ガ タンクは一人乗りだが、あれの操縦者はMSにも乗れるのでパイロットの適正に差が出てしまう。この世界ではパイロット自体が不足しているのでそれをカバーできればと幸村は考えていたが、上記の通り意外と難航したのでほったらかしにしていた。

「複座型の官制ユニットか…伝手がないわけじゃない。一度交渉してみよう。それが手に入ればすぐにでも試作機は組んでいけるんだね？」

「ええ…まあ…」

「では、すぐに交渉してこよう。このデータ。もらってもいいかい？」

言うな否や、巖谷中佐はデータを持って行ってしまった。一人残された幸村は呆然とするばかりである。

幸村の部屋を後にした巖谷中佐。手にしたデータディスクを見てつぶやく。

「あれほど将来を見ているとはな…これがどれほど画期的なものは

わからないほど愚かではない。唯依ちゃんの横浜行き…本気で考えなければならぬな」

第十五話 その男、多忙につき（後書き）

弐型魔改造フラグ！ガンタンクってかっこいいですよね！

## 第十六話　ネタとチートのガ　タンク大地に立つ（前書き）

総合的な戦闘を見ればやっぱり戦術機だけが強いだけじゃむりですよ  
ね

## 第十六話　ネタとチートのガ　タンク大地に立つ

巖谷中佐は翌々日には複座型の官製ユニットを仕入れてきた。なんでもソビエト軍に貸しがあるとかないとかで仕入れてきたそうだ。雪村は同時に巖谷中佐からもらった90式戦車（なんでアラスカにあるんだ？）と廃棄処分の確定していたF-4を引き取り、早速製作を開始した。

巖谷中佐も全面的に協力し雪村は主にソフト面を、巖谷中佐はハード面を担当し突貫作業で進めている。

その間、作業に集中するため唯依姫とのイチャイチャもシャルロットとのラヴラヴも禁止していた。

だがシャルロットは行き詰った際の意見交換や、雪村の身の回りの世話（巖谷中佐は唯依姫が）している。一度女二人が覗いたとき100年の恋も冷めるほどの悲惨な状況だったらしい。

それから一週間が過ぎたほどに

「でっできた…」

「う…うむ。見事だ…年甲斐もなく熱くなりすぎたようだ」

雪村はなんか白くなっている。巖谷中佐は10歳は老けている。だが二人ともドヤ顔は崩さない。

90式戦車の足回りに、本来砲塔が乗っている部分にF-4の上半身。そして両肩から伸びる長い砲身、両腕のガトリング。どっからどうみてもガ　タンクだった。

背中にはキャタピラで走行できない場所を飛び越えるためのブースター。これはF-4の左右の跳躍ユニットをひとつにして装備した。だがあまり使うことはないだろう。

両肩の120mm低反動砲。ショックアブソーバーを装備することにより極めて低反動で120mm弾を発射することが可能。もちろん通常の120mmだけでなく、弾頭の交換は可能。

両腕の36mmガトリング砲。6つの発射口を回転させながら発射することで強力な面制圧を可能とした。小型種から中型種まで殲滅可能だ。

胸元には戦車級などに集られたときのための小型マシンキャノン装備。背後を取られたときように両腕は反対に向くし、上半身は360度旋回可能。

オプション装備として多連装ミサイルランチャーやALM弾頭も装備可能。上位機種としてすべての装備を電磁投射砲化したモデルも作成可能。

「あとは…これ进行操作する砲手を育成するだけだ」

雪村が立ち上がろうとすると、シャルロットと唯依姫が入ってきた。

「お疲れ様、砲手のほうは僕達が育成しておいたから」

「ゆっくり休んでください、叔父様、雪村さん」

本当によく仕事ができる娘達です。雪村も巖谷中佐も開発に夢中に



なって、パイロットたる砲手の育成を行っていなかった。いくらこの機体が戦車兵のために作られたものでもいきなり操作できるわけではない。

中身は戦術機よりなのだから、とうぜん専用の訓練マニュアルも必要になってくる。最低でも戦術機用の座学は受けなければならない。そのマニュアルの作成とのための人員をシャルロットと唯依姫が行っていた。

主にシャルロットが戦車兵のトップと会談し戦車兵の出向の確約をとり、その他の書類の作成。

唯依姫が訓練マニュアルの作成及び、戦車兵への座学。

それを行いつつ男二人の、めんどろを見ていたのだ。すばらしい女性だ。全く。結婚したいね本当に。

二人につき合わされ、かつ独身の男性整備兵は燃え尽きたカスのようになっているというのに…。それはさておき。

「まだだ…まだ終わらん！あのファントムタンク（暫定名称）が動くところを見るまでは！」

「この老骨もまだ朽ちるわけにはいかない！」

管制塔へと必死に進むバカ二人。しかし巖谷中佐のタフさはすごいな。20代の現役衛士に引けをとらないって…

だが、奮闘むなく二人が管制塔についたときにはすでにテストは始まっていた。

「こちら、バスター1これより射撃テストを終了し緊急回避運動テストに移行する」

「こちらCP了解、バスター1、緊急回避はかなりの揺れになる、体調が悪くなればすぐに申し出る」

「バスター1了解」

二人がついたとき、それはすでに射撃テストが終了し最後の、光線級に狙われたとき用の緊急回避プログラムのテストだった。

「それではテスト開始」

フロントムタンクに仮想レーザーが向けられる。それを背中 of 跳躍ユニットとキャタピラの下 of ブースターで見事回避しきったフロントムタンク。

「素晴らしいな、あの図体でレーザーを回避した」

「全くです」

そんな会話を他所に

「バスター1！応答せよ！バスター1！！」

CPの女性仕官が声を荒げて叫んでいる。砲手のバイタルデータはひどいことになっている。

「こちら…バスター1……平気だ…だがこれは…地獄だ…うえっぷ

…」

新型機が早くもすっぱい匂いになってしまったようだ。

「次は模擬戦でも組んでみるか」

「アルゴス小隊あたりをあてましょう。それなりに仕上がっているはずですから」

男二人の会話に女二人が口を挟む。

「今のアルゴス小隊は強いよ？一機じゃさすがに戦闘にならないと思うけど…」

「それにまだ各部の調整や不具合がないとも限りませんし」

「そうだなせめて、3 vs 3くらいできるようにならないとなあ」

雪村は思わずため息を吐く。ここでは物資の余裕からこれ以上の製作はできない。もともとが廃棄予定のF-4を使っているので各部にエラーが出ているのがモニターを見てもわかる。急造仕様なのも原因だろう。いかにせん時間と部品がなかったのだ。

「続きは…横浜になるか」

幸村のその言葉に巖谷中佐と唯依姫の顔が陰しくなる。

第十六話　ネタとチートのガ　タンク大地に立つ（後書き）

ただこのアイデア…あっちこっちで似たようなやつがあるんだよな  
あ…

## 第十七話 その男、優雅な一日 (前書き)

一日のPV数もすごいけどユニーク数がばねえ!!前作とはユニークの伸び具合が違いすぎる…うれしい限りです。

## 第十七話　その男、優雅な一日

暫定名称ファントムタンクの開発も終わり、性能評価試験も無事終えた幸村。巖谷中佐は燃え尽きたためしばらく療養するらしい。

「しかし…さすがにこたえるなあ」

モニターとにらめっこの日が数日間続き、肩やら腰やら目が疲れている。

「目があ！…目があああ！…！」

ジタバタと意味なく某大佐の真似をして部屋を転げまわる幸村。最近自重しなくなってきた。

「幸村…一緒にコーヒーのも……」

シャルロットがお茶に来てくれたのだが、そこにはわけのわからない事を叫びながら右へ左へ転げまわっている。幸村。これは痛い…

「うん…唯依と一緒にお茶してくるね」

シャルロットの天才的気遣いにより、部屋を抜けようとするが。

「待ちたまえ、デユノア大尉。3分待つてやる」

シュタツと起き上がり、どうみても待つのはシャルロットなのにわけのわからないことをぼさきながら、なにやら準備を始める。

「何やってるの？」

「せっかくだから、外へピクニックと洒落込もうじゃまいか。こちらの世界に来てからはデートもろくにしていないからな」

シャルロットの顔が見るからにひまわりのように明るい笑顔になる。ちゃんとこういうところでポイントを稼ぐ男。真田幸村です。

「じゃあPXでお菓子もらってくるね！！」

「では俺は、シートを用意しておこう。あとパラソルな。んじゃ東ゲートに15分後で」

アラスカにパラソルは必要ないが、今日は比較的暖かい、それでも寒い。だがピクニック程度なら可能な天気だ。ちなみに、二人とも今日は非番である。というかもとより雑務程度しかない。

「恋の抑止力ゝ ほらゲームが始まるゝ」

のんきに歌いながら道具を背負いスキップしだしそんなテンションの幸村。そこに唯依姫が通りかかり思わず声をかける。

「幸村さん？どうかしたんですか？やけに嬉しそうですが…」

「やあ！唯依姫。今からシャルとデートなのだよ」

「デート…ですか…」

見る見るうちに沈んでいく唯依姫。恋する乙女フィルターがかかっているからねえ。誰から見てもシャルロットと幸村は恋人同士であ

るのは一目瞭然だ。仕事中はそんなそぶりは見せないが、オフのときの二人の緩みようは見ていて胸焼けするとは、独身整備兵の談。

「安心するんだ、唯依姫。きっと君ともデートする日が来る！」

「ほんとうですか!!」

言ってる事は最低なんですがね…今の唯依姫には麻薬のようなものです。幸村死ね!!

「っ!？」

「どうかしたのですか？」

「いや、なんでもない。それじゃ俺は行くよ」

幸村は何かに怯えるように去っていった。

「篁中尉はずいぶん中佐に御執心なんですな」

ユウヤが声をかける。

「ブリッジス少尉か、何か用か？」

「いえ、たまたま見かけ少し気になったもので」

気になったというあたりユウヤの気持ちが出ているのだが、今の唯依姫には届かない。

「そうか、なら早く訓練に戻れ。中佐が居られる期間はもうそれほ



ど長くはない。式型の性能をより完璧に引き出したいと思うのであれば中佐やデュノア大尉の元でしっかり学べ。私が言えることはそれだけだ」

唯依は話は終わりだと言わんばかりに歩き出す。

「中佐は女持ちですよ。あきらめたほうがいいんじゃないですか」

ユウヤの声に体で反応してしまう唯依姫。ユウヤを引っ叩こうと思っただが…やめた。

「そうかもしれん。だがそれだけであきらめられるような軽い気持ちじゃない」

唯依姫は振り返らず歩き出す。その背中を見つめるユウヤ。

「そんなにあの男がすごいかよ…」

ユウヤとて幸村の実力は認めている。若くして中佐。そして技術仕官でありながら、自分を軽くひねったシャルロットを凌ぐ實力を持つと言わしめるその能力。だがそれと恋愛のいろはは関係ない。

「俺も何やってんだか…」

自分の気持ちの整理が付かないユウヤ。今日はVGに奢らせようと決めた。

「やっぱりシャルの膝枕はいいねえ…」

こちらのバカカップルは遠めに戦術機の模擬戦を鑑賞しつつ、現在シ

ヤルロットの膝枕の上でくつろぐ幸村と幸村の髪を撫でるシャルロット。

「幸村って本当に膝枕好きだね」

「シャルも腕枕好きだろ？」

シャルロットが少し赤面する。ああもう愛らしいぜ。

「次はついに、ヨコハマに行くんだね」

「ああ。ようやくここから動き出すんだぜ。まあいつまでこの世界にいるかは知らんがな」

「白銀君だっけ？彼の力になってあげるんだよね」

「そそ、白やんじゃないとこの世界は救えないかんねー。ただ不安要素もあるんだがまあこの際なんとかなるだろう」

アンリミテッドの白銀かオルタの白銀か。前者なら一から鍛えて尚且つ甘ったれた性格を叩き直す必要があるので骨が折れる。00ユニットは…どうしよう？

後者なら問題なく行けるはず。まりもちゃんフラグやら伊隅大尉なんかの生存フラグを立てるだけ。

「みんな助かるといいね」

「そだな」

シャルロットが泣いたあの日以降なんとなく避けていた話題。だがいずれは話せなければならなかった話題である。

だが二人の甘い時間も終わりを告げる。

基地全体に響くアラート。第二種警戒態勢の発令の合図である。

「やれやれ…こんなイベント聞いていないぜ」

つぶやきながらも基地に走る二人。

## 第十七話 その男、優雅な一日（後書き）

感想をいただきたいのですが、良い点、悪い点を書いてもらえるとうれしいです。

あと基本的に矛盾や齟齬は必ず出てきます。押しの弱い設定もあると思います。

それでも読んでいただけるかたは神様です。

## 第十八話、ネタとチート男、墮つゝ（前書き）

ゴールデンウィーク家にいなかったなので更新できませんでした…

## 第十八話　ネタとチート男、墮つ

戦域情報に眼を通す雪村。このデータリンクという機能、他の世界にはなかったものだったりする。

人型機動兵器がある世界ではだいたいが母艦からの指示で動くものやゲリラ戦法などを得意とする部隊が多く、データリンクのようにこれほど硬度で鮮明な広域戦域データを得ることができるのは母艦の艦長か部隊長のみくらいだったりする。

戦域情報には未だ1000を超えるBETAを表す赤いマーカーで埋め尽くされている。友軍の青いマーカーのなんとも悲しいことか。

雪村が経験した世界ではこれ以上の戦力差があつての戦いもないわけではなかった。天文学的な数字を相手にすることや星と戦うことすらあつた。だがどうように味方も人間離れした集団がほとんどだった。

だがこの世界はちがう。努力や根性で機体の性能は上がらないし、進化するエネルギーもない。すべてが物理学で証明できるものしかない。ないものねだりをするつもりはないが、過去にこの世界へ転生者たちがきたことがあるとすればどのような心境になっていたのかと、ふと雪村はそんな考えに浸っていた。

「感傷に過ぎんな、くだらない」

一言つぶやくと、迫っていた要撃級の首を撥ねる。数で押し寄せる戦車級をレールガンで吹き飛ばす。

雪村、シャルロット、マイトガインの3機で小隊を組み、先ほどから遊撃部隊として各地を転戦している。ラファールリヴァイヴカスラム？の機動力、それに追従できるマイトガインの能力があつてのことだ。

本来なら、アルゴス小隊についてやりたかったがそういうわけにもいかない。いつどこが抜かれるかわからないからだ。

「雪村、左翼の中隊が壊滅に近い！援護に向かおう」

ガインから通信が入る。

「そうだね、このままじゃ持つてあと数分、危険だよ」

「了解だ、行くぞ！」

「了解」

「はああ……！」

シャルロットのラファールが突貫していく、味方のF-4がどんとんと食い破られていく中を縫って前に出る、そして迫り来るBETAをなぎ払っていく。

「はやく引いて！防衛線を立て直して！」

「助かった！一時撤退だ！」

シャルロットに救われた兵士が生き残った部隊を引いて防衛線の再

構築のために撤退する。

「ここは通さない！絶対に！」

弾薬の残弾も気にせず弾幕を張り動き回り、敵をかく乱する。一秒でも、一歩でも多く敵を足止めするためにシャルロットは己の現界と戦う。

「反応が遅い！でも…まだまだ！！！」

速射砲をばら撒き、要塞級を退け、戦車級をヒートサーベルで切り裂いていく。少し奥には要塞級が見える。

「いま抜かれたら、防衛線の構築が間に合わない！落とす！絶対に！」

中型種を無視して要塞級に向かうシャルロット。雪村もマイトガイも近くにはいるがすぐに援護できる距離ではない。だが足の遅い要塞級とてここまで前線に来ている以上すぐに後続と合流する。それは避けたいところなのだ。

飛び上がりレーザーの照射がないことを確認し、要塞級に肉薄する。触角を退け足元に潜り込み付け根を切り裂いていく。

いかなヒートサーベルとて一撃で要塞級を切り伏せるほどの性能があるわけではない。レーザー対艦刀ならば可能ではあるが。

「くっ…動きが重い！操縦が硬い…どうしたの！？」

xm2、3の限界が来ていた。ラビットスイッチも生かしきれてい



ない今の機体では現界性能まで引き出したとしてもシャルロットには遅い。

「前に出すぎだぞ！シャルロット！」

マイトガインが援護に入る。再び伸びようとしていた触角を動輪剣で切り落とす。

「ガイン…ありがとう」

背中合わせに立つシャルロットとガインを取り囲むBETA。だがこれで後方の防衛線の再構築の時間は稼げたはず。

シャルロットとガインを取り囲むBETA郡の一部に穴が開いた。

「戻れ！シャル！ガイン！」

雪村がレールガンの最大出力を持ってBETA郡に穴を開ける。その間をシャルロットとマイトガインが抜ける。

「マイティディスチャージャー！」

マイトガインの内蔵兵器のミサイルを放つ。そして2機の速射砲で更に殲滅にかかる。

「これであとは時間の問題だろう」

戦域マップにはすでに青のマーカのほうが多くなっていた。圧倒的な物量のないBETAなどもう怖いものではない。

「…ちい」

突如雪村の期待から黒煙が上がる。それも各部の間接あたりから。

「どうしたの！？雪村！！」

「雪村！！」

シャルロットとマイトガインが思わず叫ぶ。

「なに、少々無理が祟ったのさ、歴史を早めるようなことはやっぱりできねえ…か」

xm3をxm3たらしめるのは高速演算コンピュータにある。それをなくしてxm3もどきを作ったのだから機体各部の磨耗具合や付加のデータなどもちろん計算などできない。繰り返し行っていた模擬戦やデータ種集。ファントムタンク製作のために自分の機体のメンテナンスの不十分が原因だろう。

「基地に帰ろう！危ないよ！」

「雪村、私に乗れ！そこ機体はもう無理だ」

「そうは行くかよ、そらみる！敵さんがまたおいでなすったぜ！」

戦域マップからはぐれ始めたBETAの集まりである。死に体のものや死骸に埋まっていたもの、戦場を通り抜けたもの、数こそ多くはないが掃討戦に移ったあとには厄介な敵だ。

「雪村は死なせない！ガイン！行くよ！」

「応！」

シャルロットとマイトガインが奮戦するが少なからずすり抜けていくBETA。

「俺だつて…落ちるかよ!!」

機体を無理やり動かし雪村も応戦するが、雪村の機体のマーカールが消えたのはそれから約15分後のことだった。

第十八話、ネタとチート男、墮つゝ（後書き）

横浜編は20話くらいからを予定しています。

## 第十九話 その男、不屈につき (前書き)

ユニークの伸びが半端ねえっす！あとできれば感想と評価ポイントのほうもお願いします！

## 第十九話　その男、不屈につき

目の前に移るのは過去、あるいは過去と呼べた世界の光景。数々のゲームをクリアしオタク友達と会話に華を咲かせ、プライベートでは彼女とイチヤイチヤ。結婚すら秒読みだった。

給料こそ多いとはいえないが、それなり知名度のある会社に就職し上司からもそこそこに気に入られていた。人並みの幸せは得ていた。だが、そんな生活にある日起点とも言える現象が起きた。

どんどん自分を忘れていく周囲の人たち。最初は物忘れのように、だが1ヶ月もしない間に新入社員扱いをされるほどに、だが働いてきた経歴や仕事そのものがなくなったわけではないので首にはならなかったが、終盤には毎日初めましてと声をかけられる日々だった。

医者にはいけなかった。いや正確には行っただが順番が回ってくる事がなかった。そう受付で自分の存在が忘れられていた。否、受付した事が“なかったこと”にされていた。

そんな中でも毎日会社にいったのは大切な人がいたからだ。その人はまだ自分を忘れないでいてくれた。だが日に日に他人行儀になっていくようになった。

忘れられて振られるくらいなら自分から別れた方がいいと判断し、最後の日常の砦であった恋人に別れを告げついには自分を覚えていない人間がいなくなった。

家族？付き合いの薄かった家族はわりと初期の頃に忘れられていた。

その頃から名前が意味を成さなくなり適当に名乗っていた。犯罪を犯しても覚えていないんじゃないかと思ったがさすがにそれを実践する気にはならなかった。

理由も原因もわからない。医者にもいけない。八方塞でどうしもなくなっていたが死ぬ気にはなれず、それになり生活していたが、そんな生活にも飽きてきた頃再び人生の起点とも言える人物とであつた。

赤いパンツに白い白衣、下着が透けて見えるようなシースルーなインナー。知的そうな容姿。どこかで見たことがある風体の女。その女が自分を値踏みするかのように凝視していた。

「あきれた…まだ生きてたのね」

第一声がそれだった。値踏みするかのような視線は消え、すでにあきれたような表情をしている。

「まだつてなんすか。これでも毎日それなりに生きてますよ」

「誰も覚えてないのに？どんだけ図太い精神してんのよ」

「…」

「そんなに怪しまないでいいわよ、あんたを助けてあげるんだから」

目を覚ます幸村。視線の先には白い天井。エタノールの匂いの香部

屋は一面が白い。そしてここが医務室か、病室かであることに気が付く。

「また懐かしい夢を見たな…」

ここ数回の世界では見る事がなかった、始まりの夢。この夢を見るときは至って“ルール”を破ったときになる。久しぶりのルール違反。果てさて今度はどんなルールに引っかったのやら。

> 聞こえる？ <

頭の中にのみ響く声。そして周りの音は一切入ってこなくなる。

> ええ、聞こえてます <

> 久しぶりね、別にあんたは死にやしないんだからたまには連絡いれなさいよね <

> 嫌ですよ、気分のいいもんでもないしなにより痛いですし <

> 連れないうねえ…っで今回のルール違反だけど…わかる？ <

> 先取りしすぎですか？ <

> 半分正解ね、もう半分は世界への干渉がゆる過ぎたのよ <

淡々とした会話の流れ。必要事項と結果が流れる会話。温かみはない。

> さすがにそれは酷でしょう？時代の過度の先取りは禁止、世界観



を壊すような兵器の転用も禁止。その上で世界にもっと干渉しろと  
？<

>あたしに言わないでよ、これは結果でしかないんだから<

>…<

>あたしが言いたいのはそれだけよ？あとここからは私的な会話ね<

>なんです？<

>この世界、すでに本史とはだいぶ離れつつあるわ、もちろん良い  
意味でも悪い意味でもね<

>なら俺がすることは悪い意味の駆除ですか<

>当面はね、その上であんたがやるべきことをこなして、やりたい  
ようにやりなさい<

>わかりました<

>あと…あんまり無理すんじゃないわよ<

>無理難題を仰せの癖によく言いますね<

>そういう意味じゃないわよ、それじゃあね<

そして生活音が耳に入ってくる。体を起こし周囲を確かめる。

「シャル…」

シャルロットが隣で寝息を立てている。看病してくれていたのだろう。目の下には隈が見えるし眠りも深そうだ。

「失礼します…えっ？中佐！お目覚めになつていたのですか！！」

唯依姫がシャルにかけるであろうシートを持ってきていた。そして幸村の目覚めに驚いているところだろう。

「すまないね、唯依姫。心配かけたようだ」

「いえ、お体はどうですか？幸いどこにも異常はないとのことでしたが」

「ああ、大丈夫だ、問題ない。それより首尾はどうなった？」

「中佐が撃墜されて以降すぐに戦闘は収束に入りました。アルゴス小隊もソビエトの部隊もほぼ無事です。ですが総合的な損害は少ないとはいえません」

うつむく唯依姫。テストパイロットや技術士官など戦えるものがあり多くはないユーコン基地。ソビエトのように前線部隊をよこしている国もあるが大抵は凄腕だが実戦経験のない、あるいは少ない衛士で行われていた計画だ。このような状況になればそれなりの被害もでるだろう。

「そうか…俺は生きているだけ幸せなほうか」

「それと中佐、本日を持ってアラスカ基地への転属任務の満期となり、明日より国連軍横浜基地への移動命令が来ています」

本来なら基地司令からもらうはずの辞令を唯依姫が持つてきていた。

「そうか：まあ動けないわけじゃない、荷物をまとまるとするか」

「それには及びません、デュノア大尉とともにすでに荷物はまとめさせていただきました」

「なん……だと!？」

唯依姫の笑顔であり目が笑っていない素敵な笑顔を向けられ。

「一部の風紀に乱れる書物はすべて焼却させていただきました」

[Nooooooooooooo] [.....]

Oooooooooooooo [.....]

捨てられた事よりも見られたほうが恥ずかしいと思うのは幸村の談。

「それでは中佐、私はこれにて失礼させていただきます」

「あ……ああ。短い間だったけど、ありがとう、唯依姫。アルゴス小隊の連中はきつとまだ伸びるよ、しっかり見てやってくれ」

「それでは失礼いたします」

唯依姫はそう言つて部屋を出て行つた。ずいぶんあつさりは最後だつた。まあ明日は見送りには着てくれるだろうが。

そして隣で眠るシャルロットの髪を撫でながら、ついに物語が始まったと期待と絶望を抱きながら幸村はまた眠りに付いた。

## 第十九話 その男、不屈につき（後書き）

シリーズ管理するとまた足跡やらユニークも最初からになるのか？

第二十話　ネタとチートを持って今、始まる（前書き）

シリーズ製作に切り替えました。っていうかかなり話数が伸びてしましまして…文才のなさに嘆きます…

## 第二十話　ネタとチートを持って今、始まる

幸村は今、流れる景色を見ている。もうすでにアラスカの景色はなく海しか見えない。

一度宇宙に出て再度突入した船を入れ替えて飛行中。BETAのいない場所を縫って飛ばなければならないので移動には本当に時間がかかる。

隣にはうつらうつらと頭を振っているシャルロット。幸村が撃墜されてからこっち付きっ切りで世話をしてくれている。×××のほうも、もちろんおろそかにはしていない。よっているいと疲れが溜まっているのだろう。

ユーコン基地でのお別れは実にあっさりしたもので、一部からは不死身だのゾンビだの悪運男など不名誉ながらも幸村を敬う声もあったが一番涙の別れを期待していた唯依姫が敬礼ひとつで済ませたのにはさすがに幸村も堪えた。

だがなんとなく唯依姫がうれしそうにしていたのが気にかかるが…

「さて…まずは横浜で何をしようかね…」

XM3は時期を待てば仕上がるだろう。よってそこは踏み込めない。ならば香月印の高性能コンピューターを先にもらっているいろいろと下準備をしておくか…

横浜基地にてファントムタンクの製造ラインが巖谷中佐からの要請で整っている。香月副指令の目にとまったからだ、中隊クラスは用

意できるだろう、それに合わせての操縦士の育成。これもすでにシヤルロットと唯依姫が作ってくれているので練成も始まっているだろう。

ともすれば、やはり自分の乗る機体を手配しなければならない。戦術機もいいが戦場に立つときは常にマイトガインと一緒にするため戦術機よりもインパクトのある機体に乗ったほうがマイトガインの印象をうすくできる。

目立ちすぎるのだ…マイトガインは。

「手ごろなところでやっぱMSだよなあ…」

リムーバブルフレームによる可変機能付きのMSが幸村の理想。空を飛ぶ必要はこの世界には必要ないが戦域を高速で移動するにはやはり可変機能は有利である。

「メタス…ゼータ…いやここはSEEDで攻めるか？」

ぶつぶつ窓に向かって話しかける幸村。あまりにも気持ち悪すぎるので端末を開く。

「シヤルにはラビットスイッチを最大限に生かした攻撃ができる機体…おお！アシュラテンプルなんてよくね！？」

A級ヘビーメタルであるアシュラテンプル。背中のサーカスバインダーを含めて4本のアームから繰り出される攻撃、そしてビーム兵器っぽいパワーランチャーにバスターランチャー。エネルギーボンバーと火力も高い。フロツサーによる高機動も完備している。



さすがに太陽光発電は無理なので内燃機関を装備する、さすがにバッテリーじゃあアシュラテンブルの能力は再現できない。

一人で盛り上がる雪村。とりあえず製作費用は気にせずフルスペックのアシュラテンブルをシャルロットの乗機とし設計図をガインからロード。ベースとなる戦術機を選定し動力部の全換装、機体制御のための管制ユニットの交換、などなど資料をまとめて行く。

「アシュラテンブルはまだこれでいける…見た目は所詮ハリボテだからな」

雪村が考えている機体は可変機能付の機体。こればかりは一から作らねば成らない。

基本となるフレームがないからだ。細かい部品は戦術機のものを利用するとしても可変機能は海神くらいしかノウハウがなく、まず戦闘機の時代はすでに終わっている。

「まあ設計図はあるんだし…ちょっと時間かかるけどまあなんとかなるか」

香月博士に提出する資料の中にまぜておこう。

そして最後には悲運の主人公である白銀武の乗機を考える。いつでもコンセプトはもうすでにできているが。

「やっぱ主人公が量産機つてのもいいんだけど…せっかく大団円目指すんだし？最強チート機能をつけてあげなきゃなあ」

不知火式型をベースに、すべての部品を武御雷が使用している高品

質のものに交換、これだけで耐久力が格段にあがる。そしてこちらにも内燃機関を装備して作戦稼働時間の延長及び、高出力兵器の搭載を可能とする。

「魔改造！魔改造！」

体の各部に埋め込みのスラスターを装備、頭部をツインアイにして存在感を演出。

跳躍ユニットを廃止して、腰部に二門のレールガン。背面には高出力プラズマ収束砲を二門。廃熱フィンを兼ねた左右3枚対照の大型ウィングスラスター

これで元ネタがわからない人はいないだろう。

専用武装としてビームライフルの代わりにサーマルガン。小さな格にプラズマを纏わせた高熱エネルギー兵器である。もちろん手腕から電力の供給を行って使う。

これでバルジャーノンのカイゼルに近い扱いができるはず。それにこの世界の戦術機の扱いを覚えている白銀武ならもう敵はいないだろう。機体性能を前に仲間を見殺しにすることもないはず。アンリミだったら…それは考えないでおこう。

巖谷中佐にはすでに搬入を依頼しているのでこちらも問題なし。

そしてそうこうしているうちに、輸送機は着陸して車に乗り換え横浜基地が眼と鼻の先に迫っていた。

ゲートを抜け、横浜基地に入るとそこには白衣を軍服の上から羽織

った香月夕呼と社霞が並んで待っていた。

「お初にお目にかかります、香月副指令と社少尉ですね？自分は真田雪村中佐であります」

「同じくシャルロット・デュノア大尉であります」

敬礼をもって挨拶をする。シャルロットもそれに習う。

「建前はいいわ、欧州からよくきたわね、アラスカは満喫できたかしら？」

「ありがとうございます！アラスカではなかなか良い経験ができましたよ？」

アラスカでの最初の事件を知ってるのだろう。ニヤリと笑う夕呼に雪村もニヤリと笑って返す。

「そ、ならいいわ。わざわざ欧州からアラスカを回ってきたんだもの、退屈させるんじゃないわよ？」

「ええ、香月副指令の夢をきくと叶える人物とめぐり合うことでしょ」

（めぐり会う？）

雪村はニヤリとして笑みを崩さず、ついに物語の始まりの場所。国連横浜基地に赴任するのだった。

第二十話　ネタとチートを持って今、始まる（後書き）

次からは新作を兼ねた横浜編スタートです！今までありがとうございました？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5735s/>

---

マブラヴオルタネイティブ～ネタとチートで目指せ大団円・・・の序章編～

2011年5月10日13時40分発行